

GPS-Academic全受検者集計データ 6 か年比較「大学1年生のトレンド変化」

まなぶとはたらくをつなぐ研究所

株式会社 ベネッセ i-キャリア

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

■ 過去8か年間の入試環境の変化

年度	2025年度の学年	入試年度時点のトピックス
2018年度		・ 定員管理厳格化により、難関私立大で合格者大幅絞り込み→全面的に難化
2019年度		・ 定員管理厳格化により、難関私立大で志願者減→中堅私立大で難化
2020年度		・ コロナ禍によるキャンパスロックダウン ・ 大学入試センター試験 最終年度 ・ 定員管理厳格化の反動で合格者数が増加に反転→易化
2021年度		・ 大学入学共通テスト 初年度 ・ 一般選抜における繰り上げ合格者数の増加 ・ コロナ禍による私立大併願校数の減少
2022年度	4年生	・ 大学入学共通テスト 平均点大幅ダウン ・ コロナ禍による私立大出願校数減少の継続 + 合格者数の増加→易化
2023年度	3年生	・ コロナ影響 緩和 ・ 高校生活3年間すべてコロナ禍だった学年 ・ 私立大の定員割れが5割を初めて超える
2024年度	2年生	・ 旧教育課程 最終年度 ・ 「年内入試」へのシフト加速 ・ 難関私大への積極出願と、中堅私大での共通テスト利用離れ→二極化
2025年度	1年生	・ 「新課程」入試 初年度 ・ 大学入学共通テストの平均点アップ+「情報」導入 ・ 私立大学では年内入試、一般入試ともに志願者数増

GPS-Academic 新入生版

	受検期間	集計人数
大学4年生 大学3年生 大学2年生	2020年度新入生 2020年度の受検可能期間に受検したすべての1年生 (2020年2月～2021年2月)	85,963名
	2021年度新入生 2021年度の受検可能期間に受検したすべての1年生 (2021年2月～2022年2月)	103,547名
	2022年度新入生 2022年度の受検可能期間に受検したすべての1年生 (2022年2月～2023年2月)	112,550名
	2023年度新入生 2023年度の受検可能期間に受検したすべての1年生 (2023年2月～2024年2月)	131,607名
	2024年度新入生 2024年度の受検可能期間に受検したすべての1年生 (2024年2月～2025年2月)	137,310名
大学1年生	2025年度新入生 2025年2月～2025年5月31日までに受検した1年生	129,457名

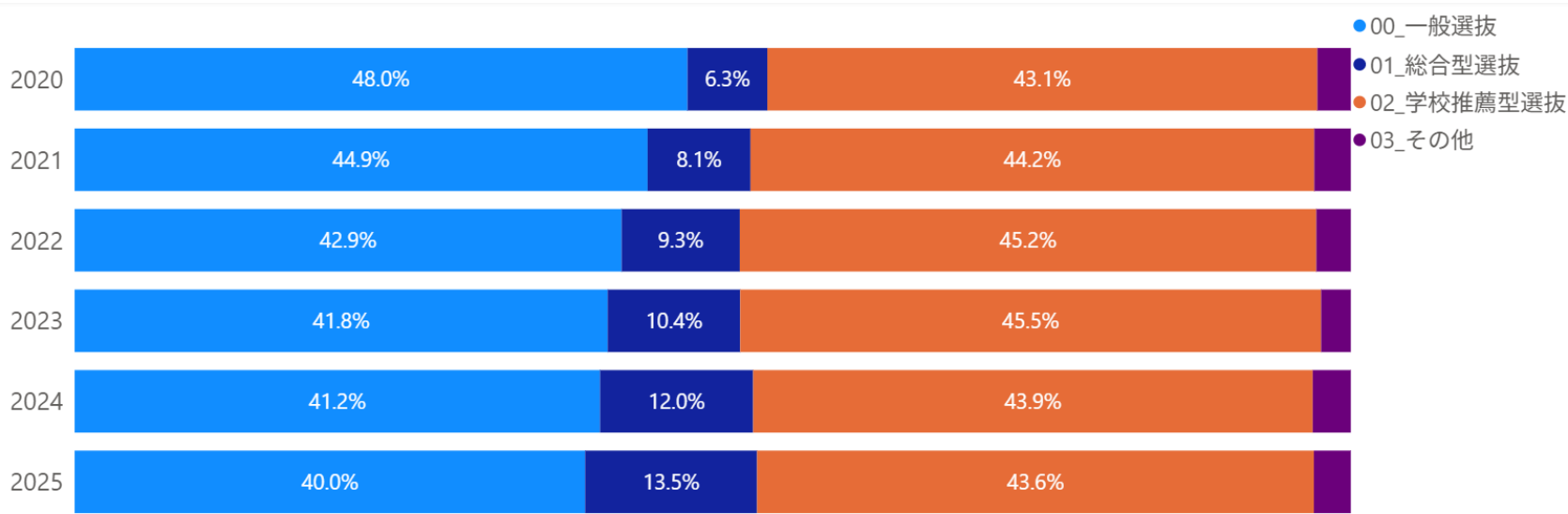
仮説

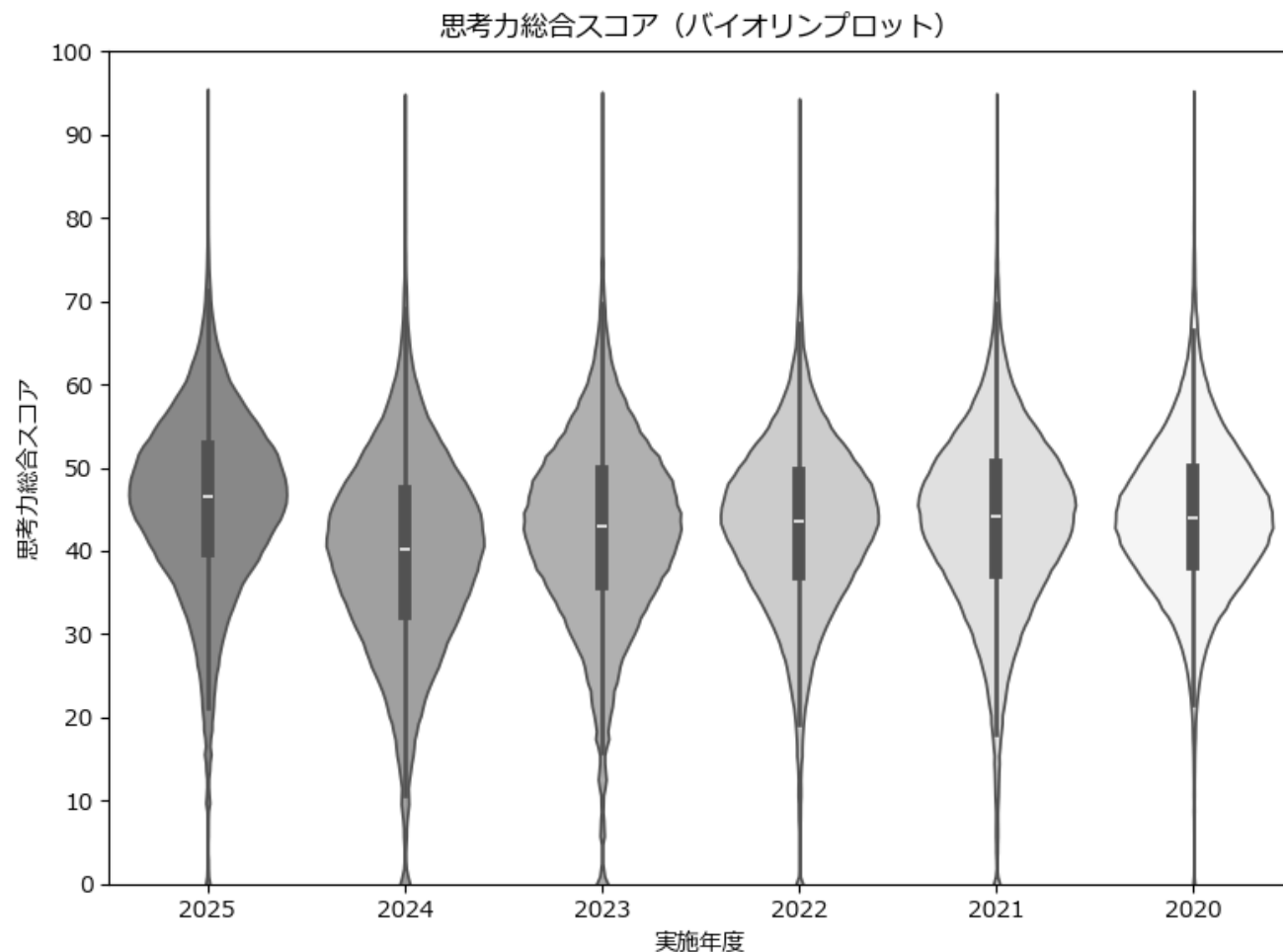


新課程等の影響で、新入生の学び方や経験に変化が見られるのではないか

- ・ 「新課程」での学びによる学習時間や大学選択基準などの変化
- ・ グループワークやディスカッションなど、大学の授業にも必要な経験や姿勢・態度の変化
- ・ 高校ごとの「探究学習」への取り組み方の違いによる影響の有無 …等

実施年度	00_一般選抜	01_総合型選抜	02_学校推薦型選抜	03_その他
2020	41,280	5,382	37,048	2,253
2021	46,485	8,352	45,742	2,968
2022	48,237	10,425	50,845	3,043
2023	54,968	13,666	59,907	3,066
2024	56,528	16,471	60,211	4,100
2025	51,783	17,442	56,483	3,749

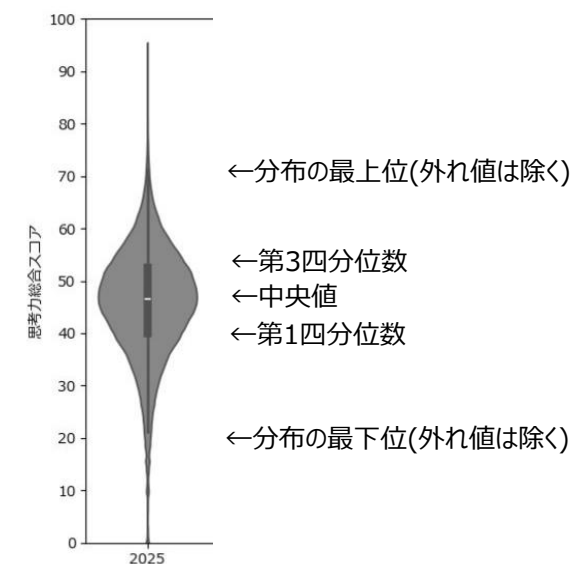




バイオリンプロットとは…

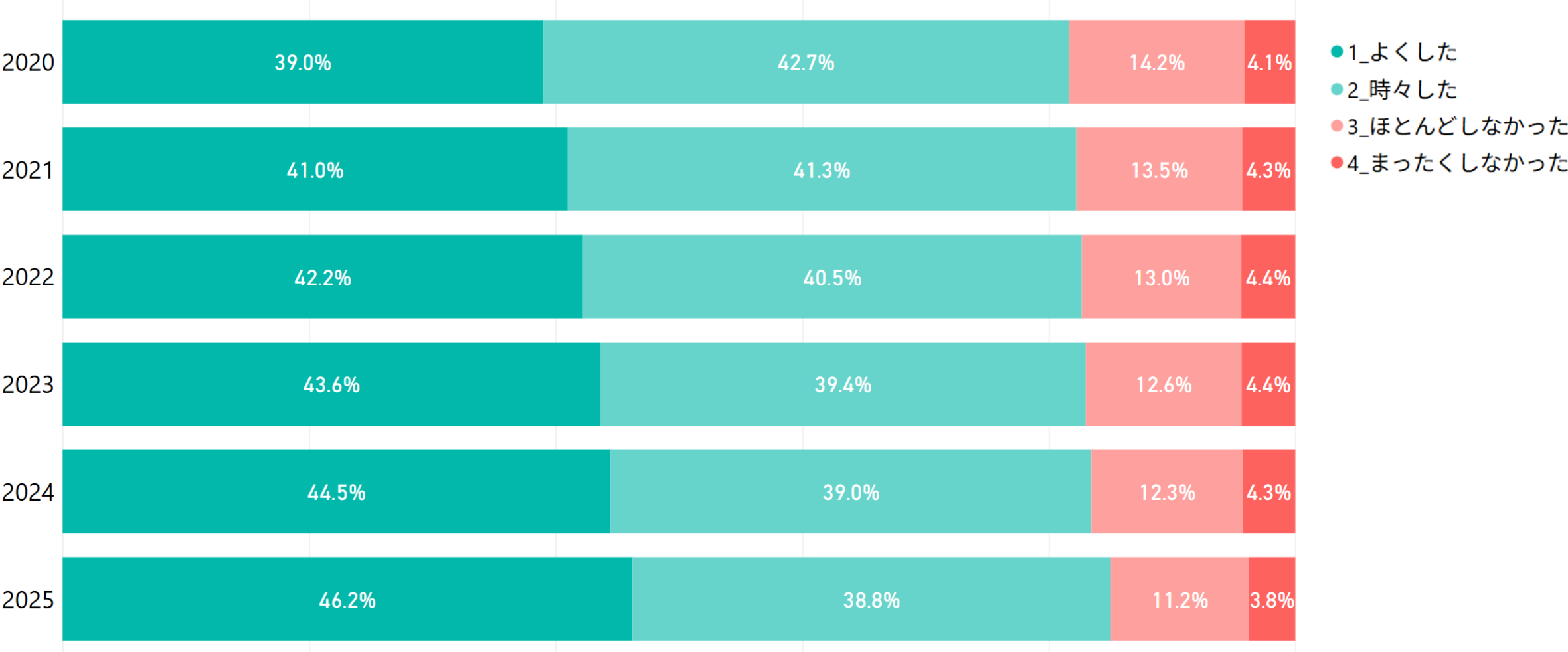
形状から分布の特徴を把握するビジュアル。

今回は、箱ひげ図を組み合わせたビジュアルになっており、中央値、四分位範囲の確認も同時に行えます



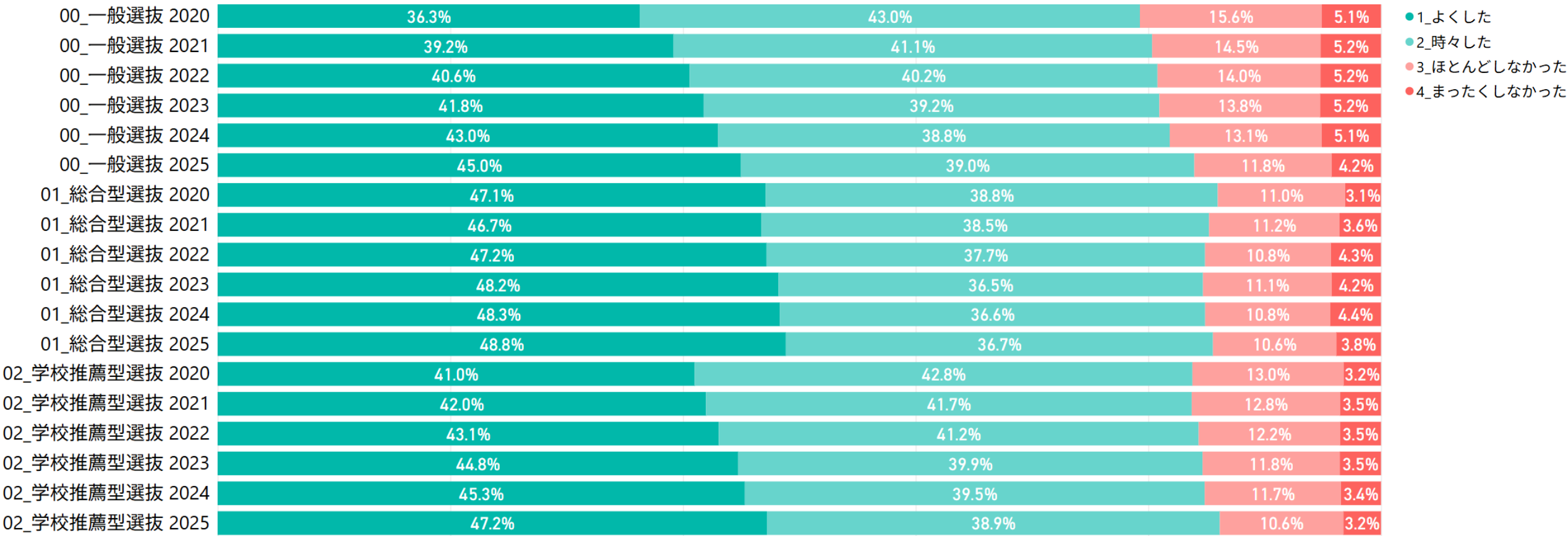
思考力の高い層がやや増加

2025年では思考力総合で高いスコアとなった学生がやや増加した
6か年で比較すると、分布状況などについては大きな変化は見られない



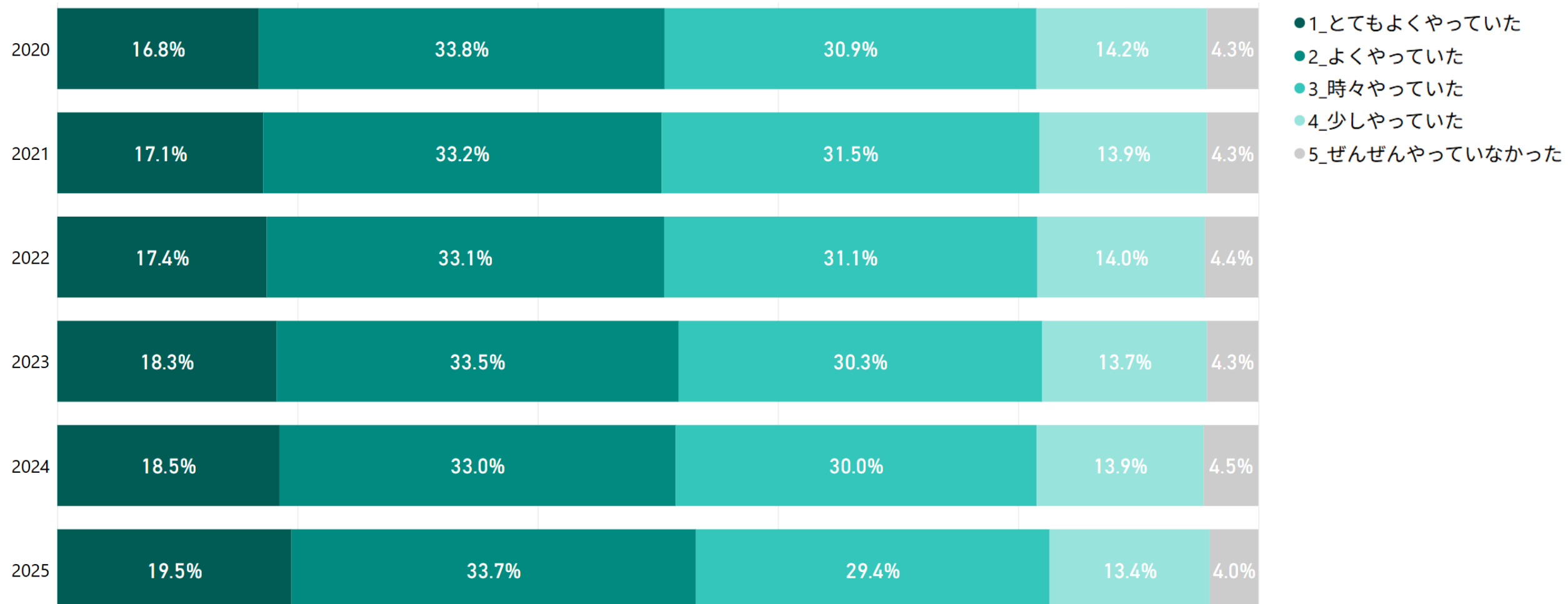
5 割近くの学生がグループワークやディスカッションに積極的に参加

ディスカッションへの積極的な参加を「よくした」と回答した学生の比率が年々上昇し、「よくした」の比率が5割近くに
2025年度は「ほとんどしなかった + まったくしなかった」と回答した学生の比率も減少



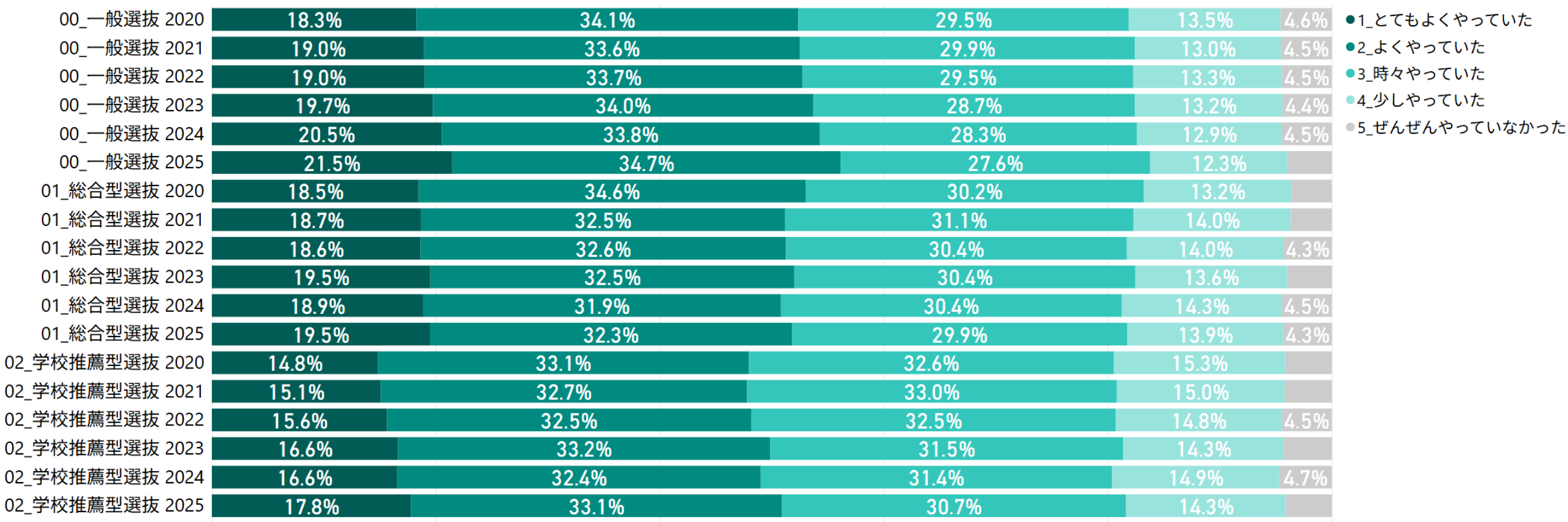
一般選抜の増加率をもっとも高い

どの入試方式でも「よくした」の回答率が5割弱になり、否定回答（「ほとんどしなかった」+「まったくしなかった」）も減少
中でも一般選抜での「よくした」の回答率は2020年度と比較して2割以上増加



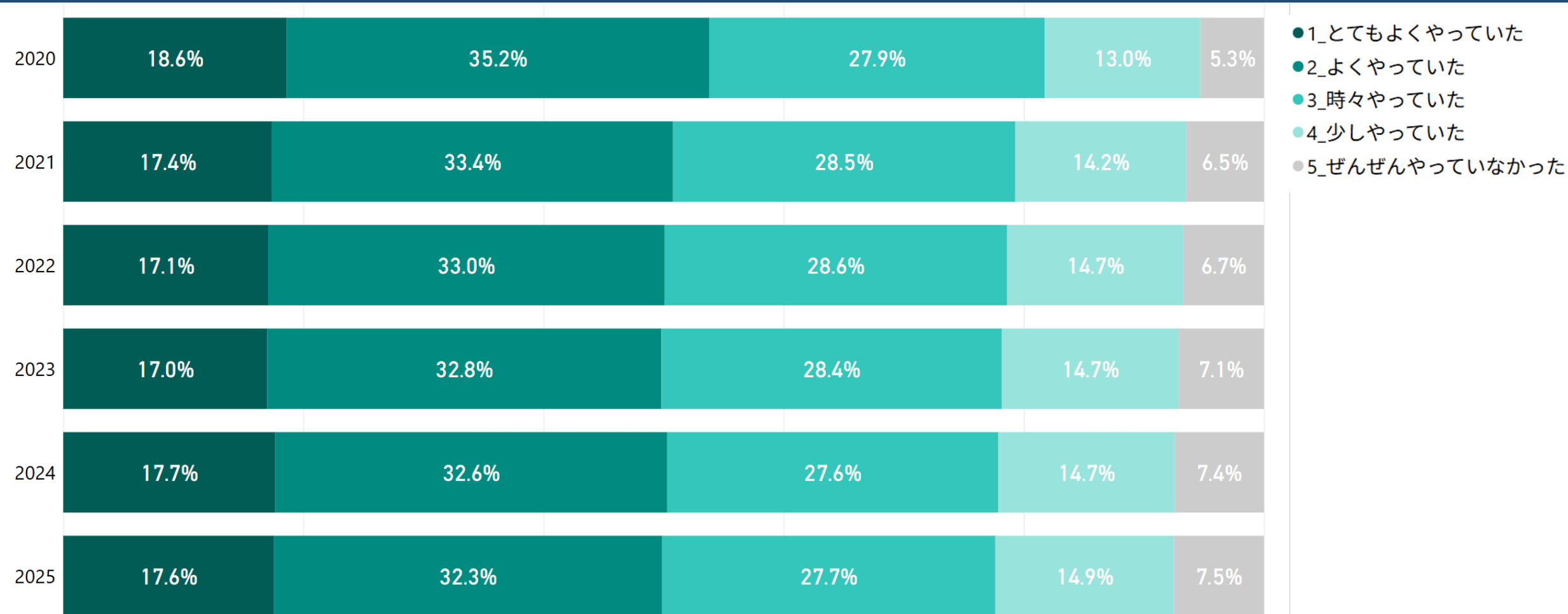
議論の目的を明確にする学生が増加

議論の目的を明確にする経験を「とてもよくやっていた」+「よくやっていた」学生が増加
特に、「とてもよくやっていた」の回答率は6年間で一貫して増加



一般選抜での経験率が高い

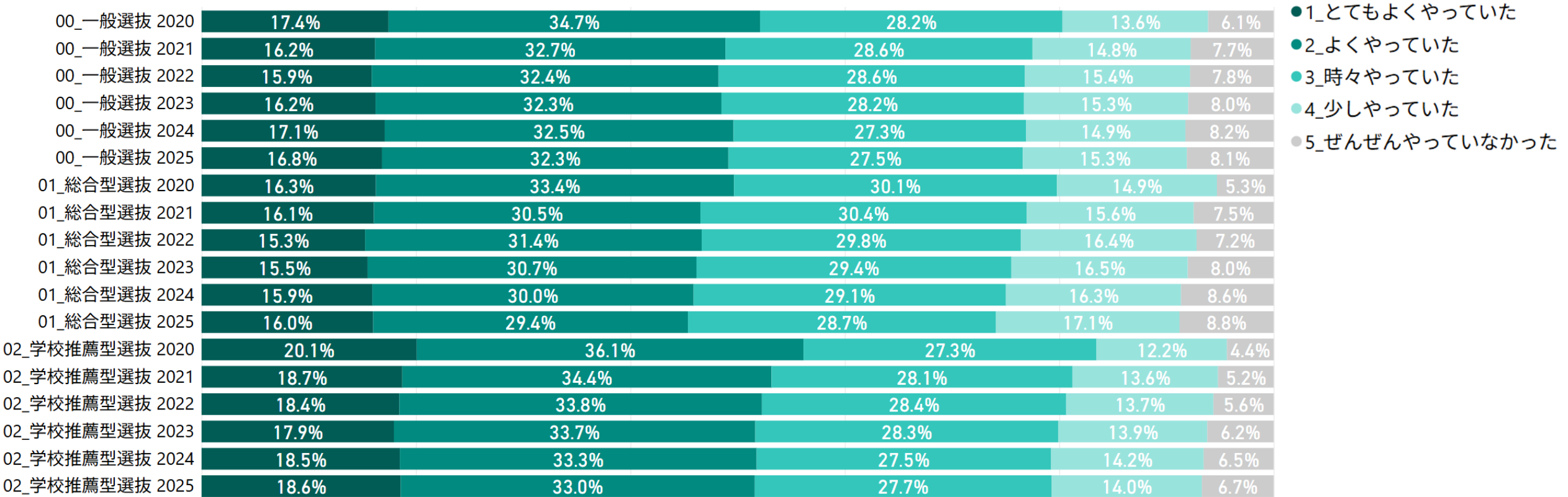
議論の目的を明確にする経験を「とてもよくやっていた」+「よくやっていた」と回答した比率は一般選抜が6割近くともっとも高い
一般選抜と学校推薦型選抜は「とてもよくやっていた」の回答率が5年連続で上昇



「原因は何か」を考える経験には大きな変化なし

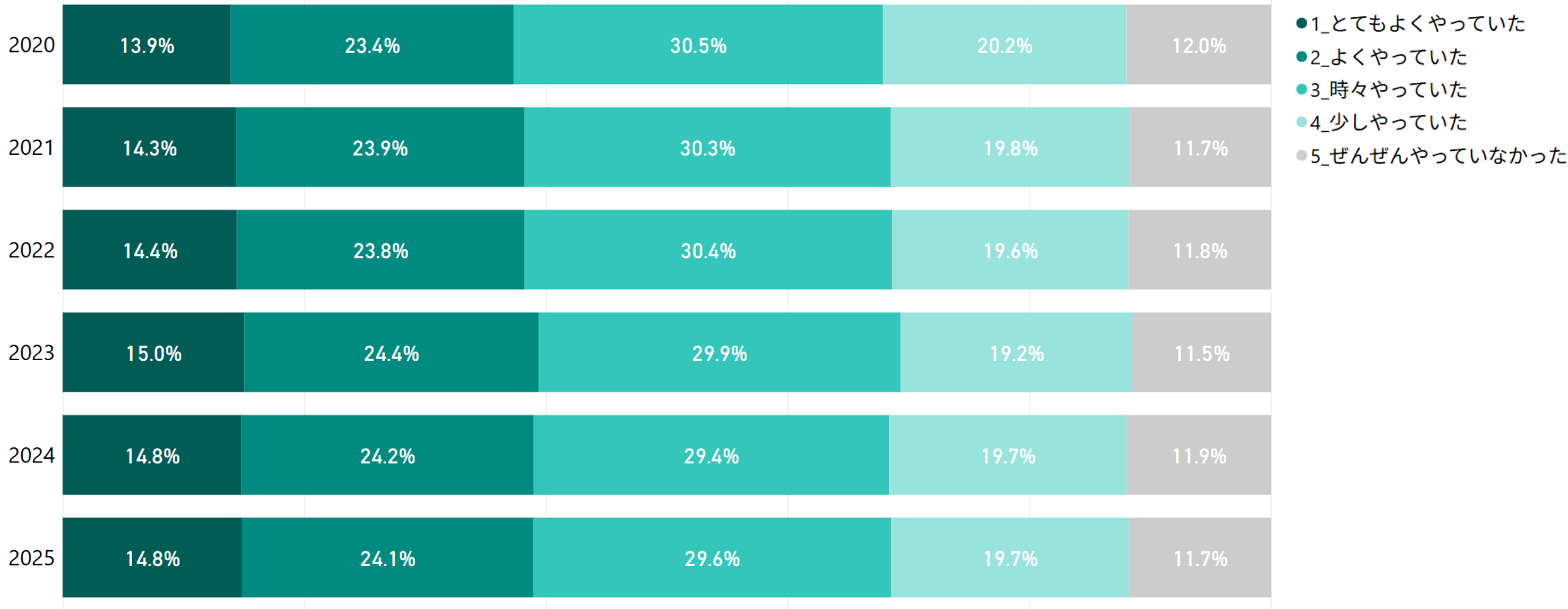
「原因は何か」を考える経験の回答傾向に大きな変化は見られない

2020年から2021年にかけて「とてもよくやっていた」+「よくやっていた」の回答率がやや下がって以降は、ほぼ同じ比率で推移



学校推薦型選抜の経験率が高い

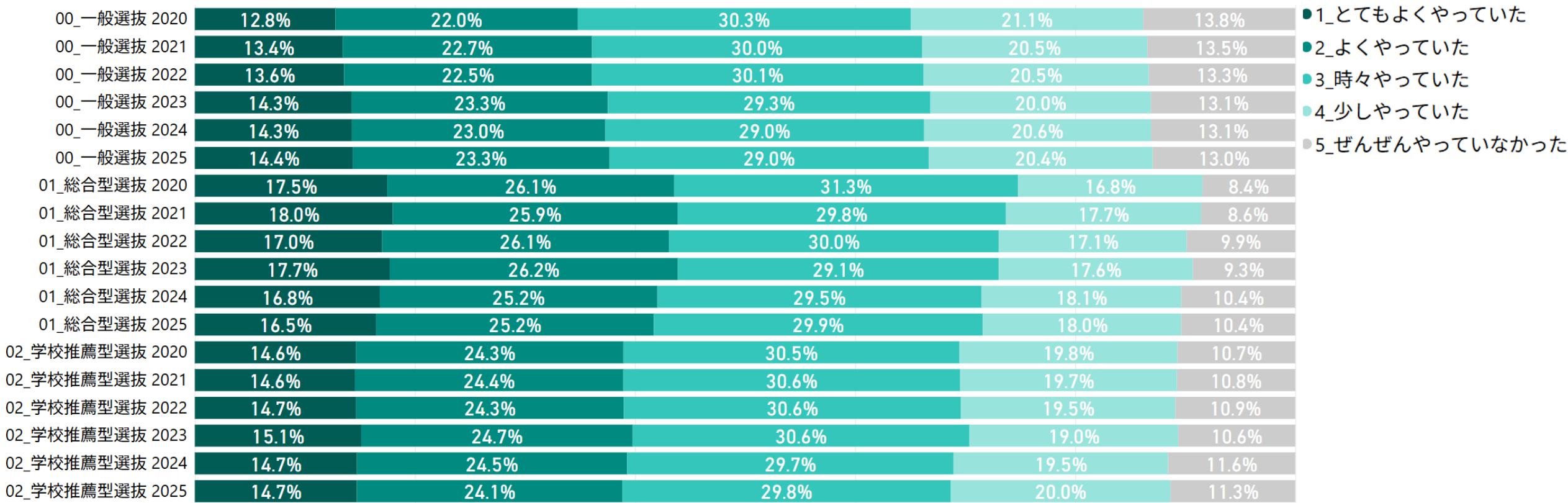
「原因は何か」を考える経験を「とてもよくやっていた」+「よくやっていた」とする比率は、学校推薦型選抜が他の選抜よりも高い
一方で総合型選抜の「少しやっていた」+「ぜんぜんやっていなかった」の回答率が増加傾向



主体的に問題解決をする経験には大きな変化なし

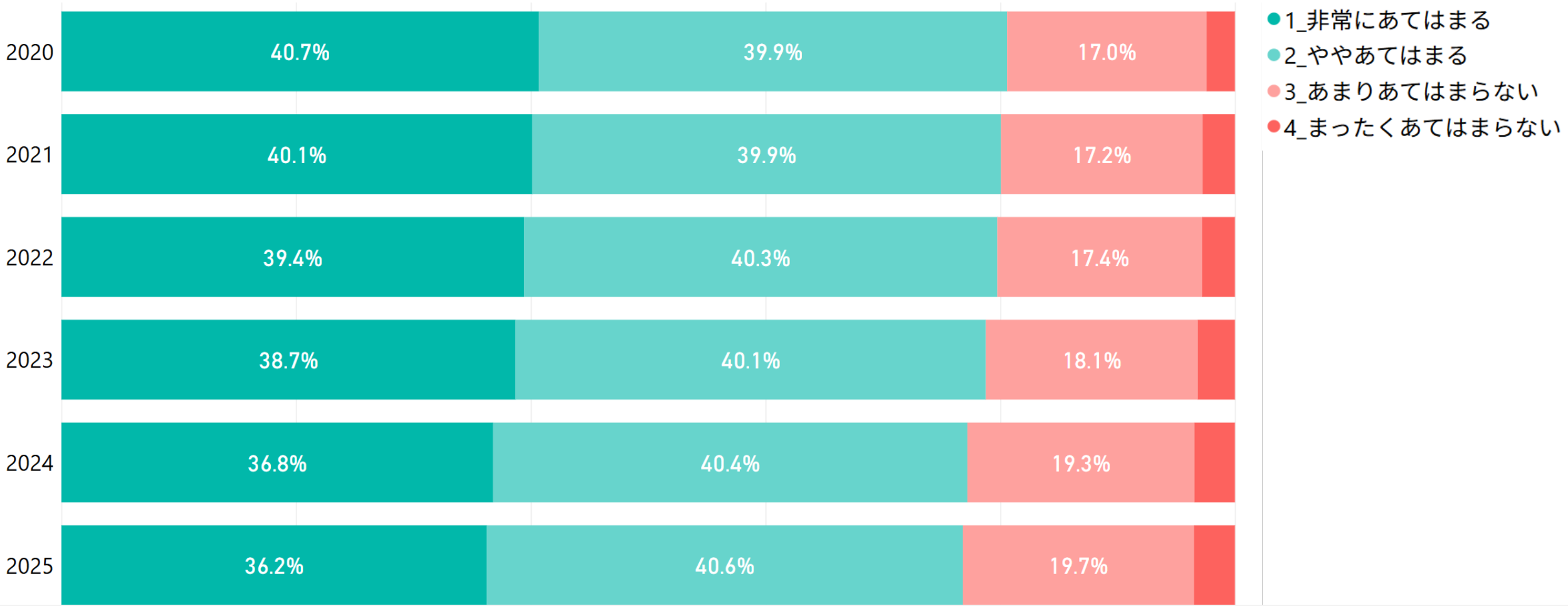
主体的に問題解決をする経験の回答傾向に大きな変化は見られない

「とてもよくやっていた」+「よくやっていた」の回答率は4割弱で、他の経験の項目と比較するとやや少ない



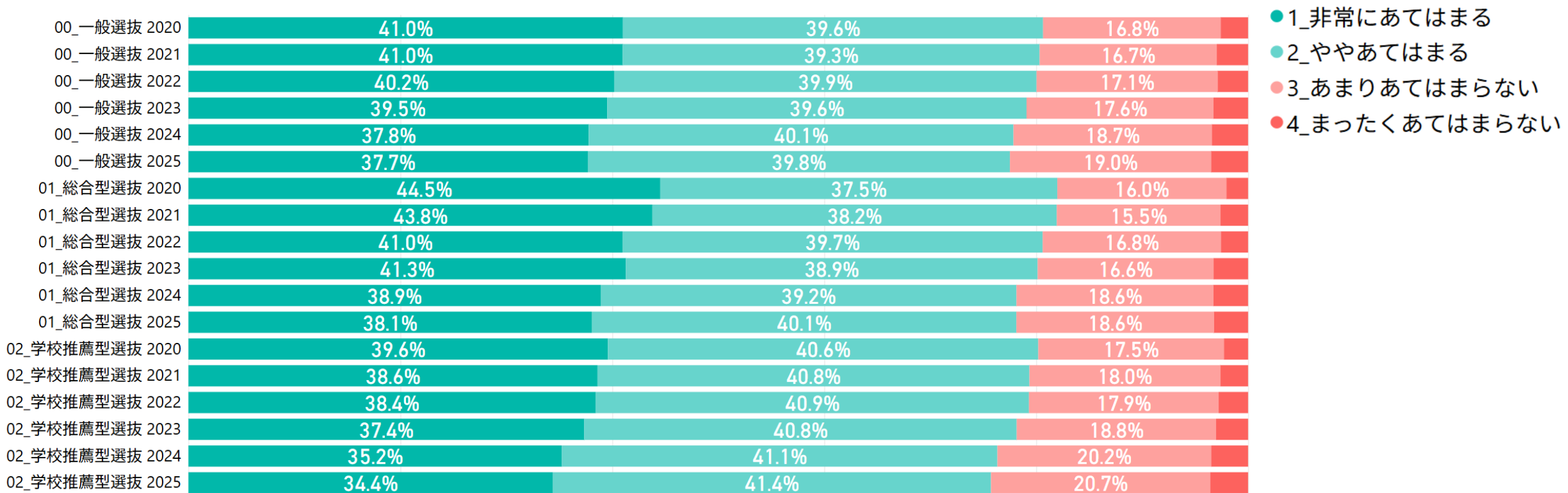
総合型選抜の経験率が高い

総合型選抜では、主体的に問題解決をする経験を「とてもよくやっていた」+「よくやっていた」の回答率が4割子を超え、他の選抜よりも高い
ただし、その比率は6年間で見るとやや減少傾向



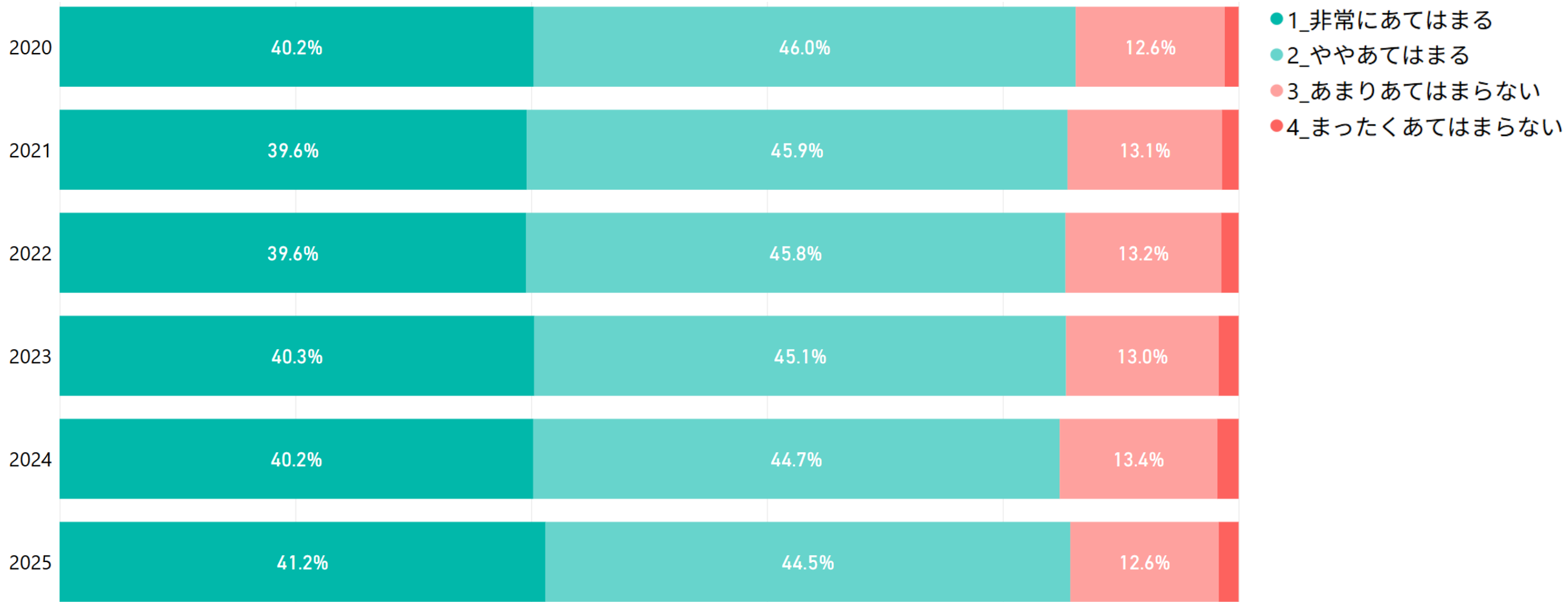
多様な人との交流意欲は、やや減少傾向

8割前後の学生が「多様な人と交流したい」との意欲を持つ（「非常にあてはまる」+「ややあてはまる」）
ただし、その比率は5年連続で減少傾向



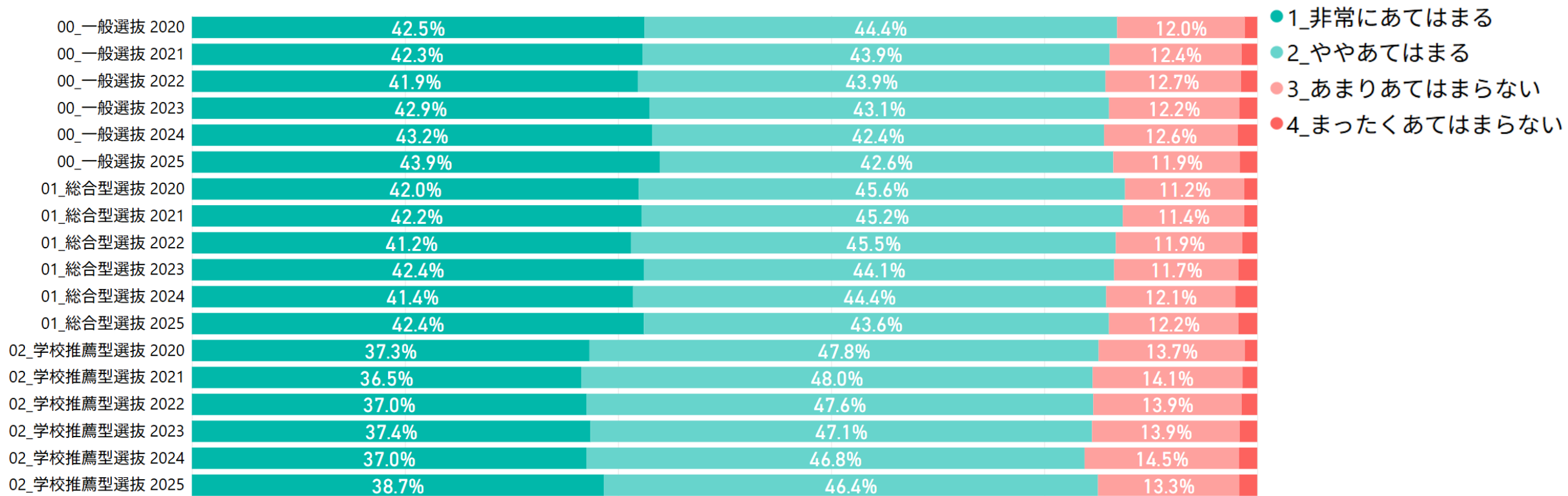
どの入試方式でも減少傾向

どの入試方式でも5年連続で肯定回答率（「非常にあてはまる」+「ややあてはまる」）が減少
どの入試方式も肯定回答率は8割弱であり、差は見られない



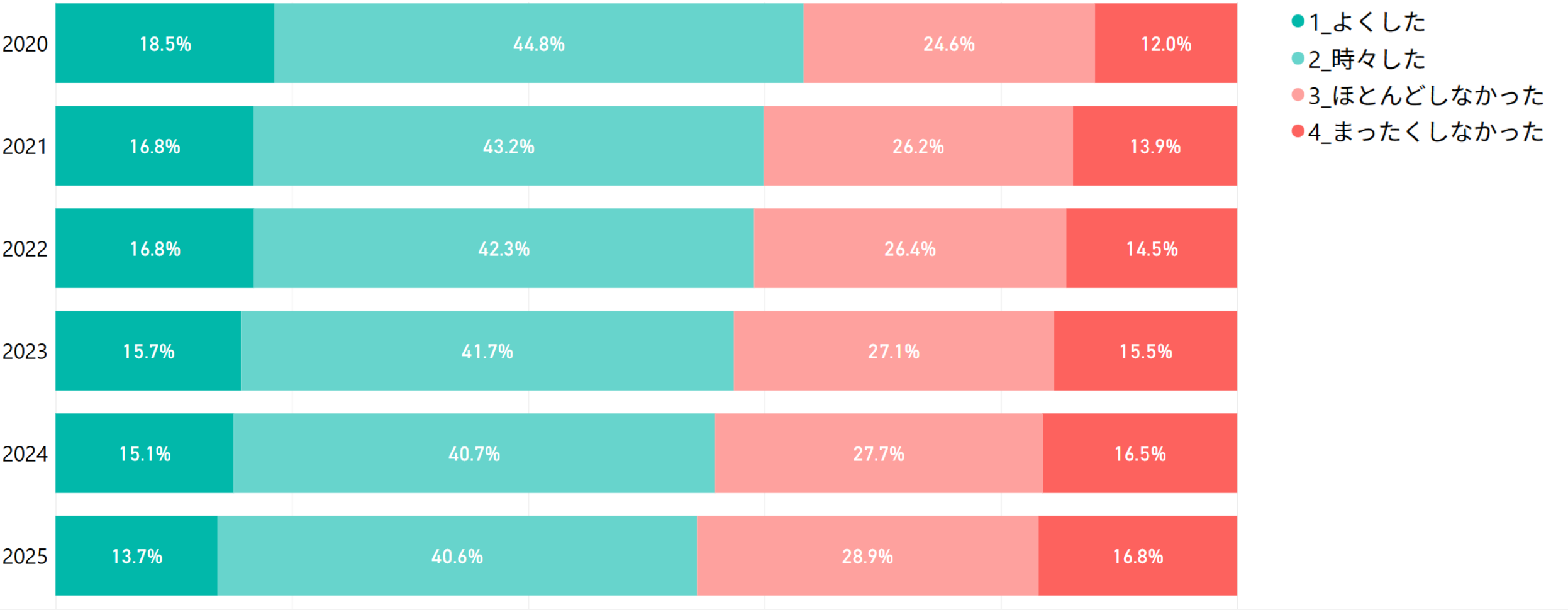
独自意見を持つとする意欲は、大きな変化なし

独自意見を持つとする意欲の肯定回答率（「非常にあてはまる」+「ややあてはまる」）は9割弱
6年間でその比率に大きな変化は見られない



学校推薦型選抜では「非常にあてはまる」がやや少ない

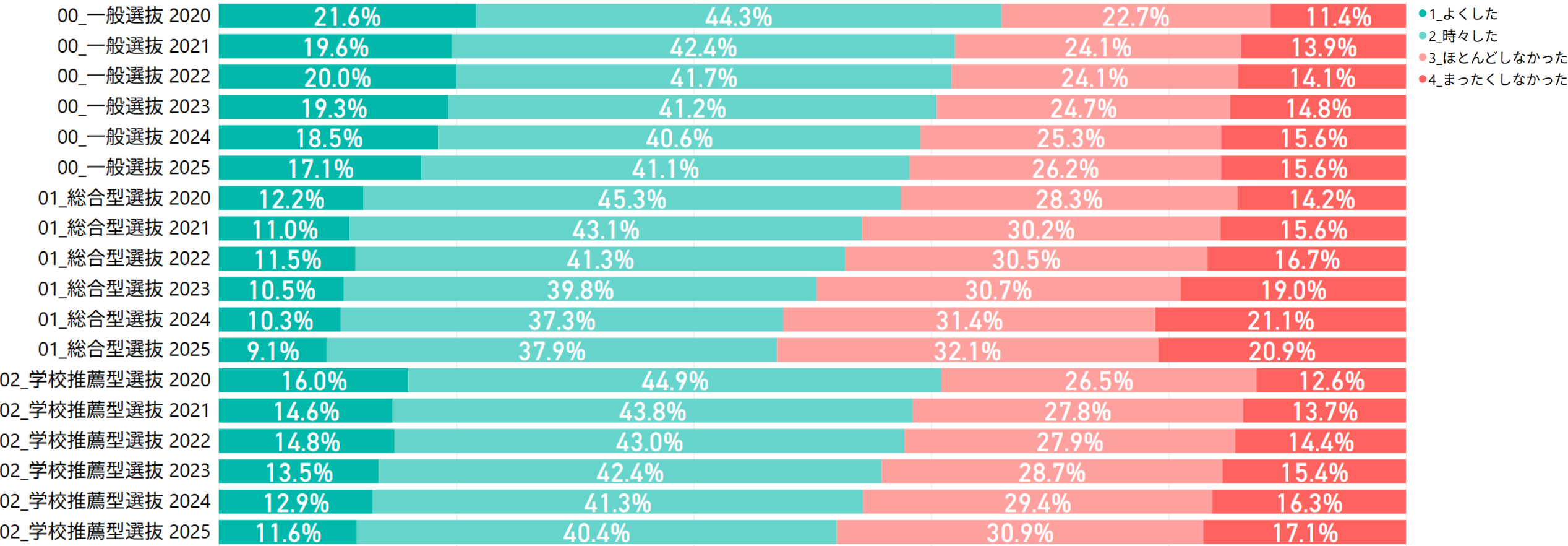
入試方式ごとの肯定回答率（「非常にあてはまる」+「ややあてはまる」）には大きな差は見られない
ただし、「非常にあてはまる」のみの回答率では、学校推薦型選抜がやや低い



予復習をする習慣は減少傾向

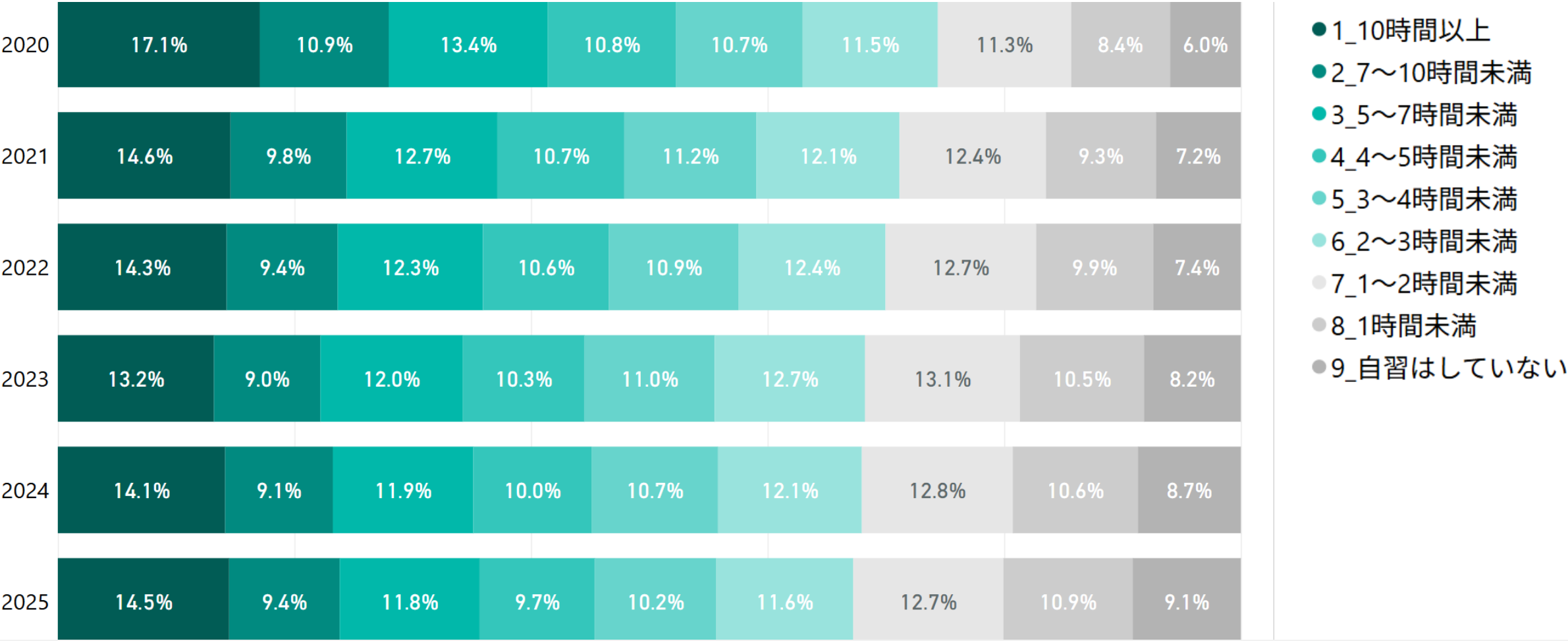
予復習をする習慣は5年連続で減少傾向

2020年に6割強あった肯定回答率（「よくした」+「時々した」）も、2025年では5割強に



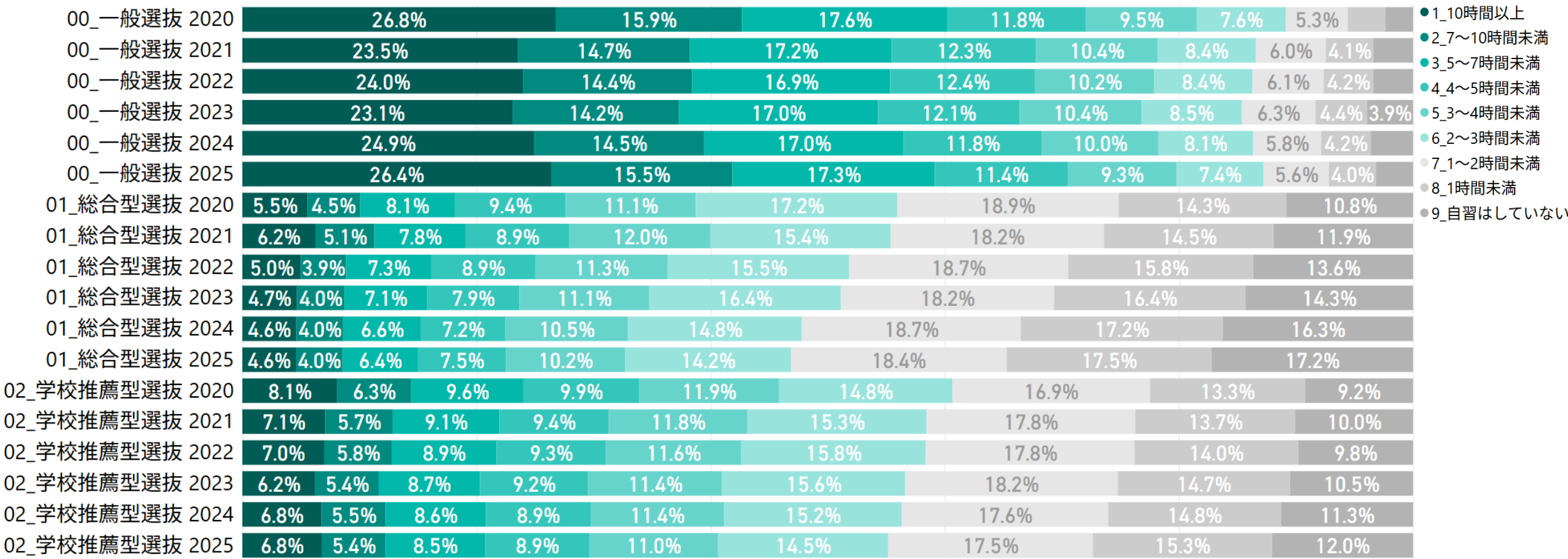
どの入試方式でも一貫して減少

どの入試方式でも予復習の習慣に対する肯定回答率（「よくした」+「時々した」）は一貫して減少
中でも総合型選抜の減少率がもっとも高く、2025年では「よくした」の回答率が1割を切っている



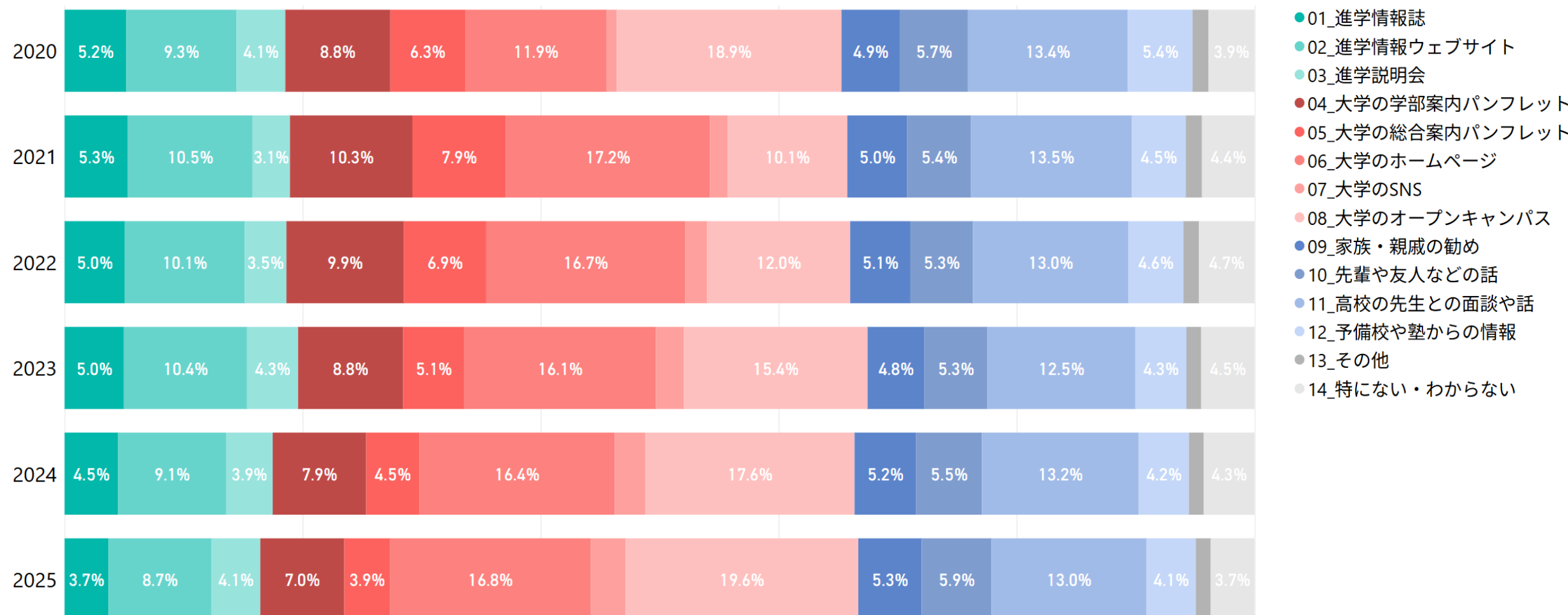
自習時間は二極化

自習時間を3時間以上確保していた学生の比率は2023年以降、5割強で安定的に推移
一方で「1時間未満」と「自習はしていない」の比率は5年連続で増加傾向



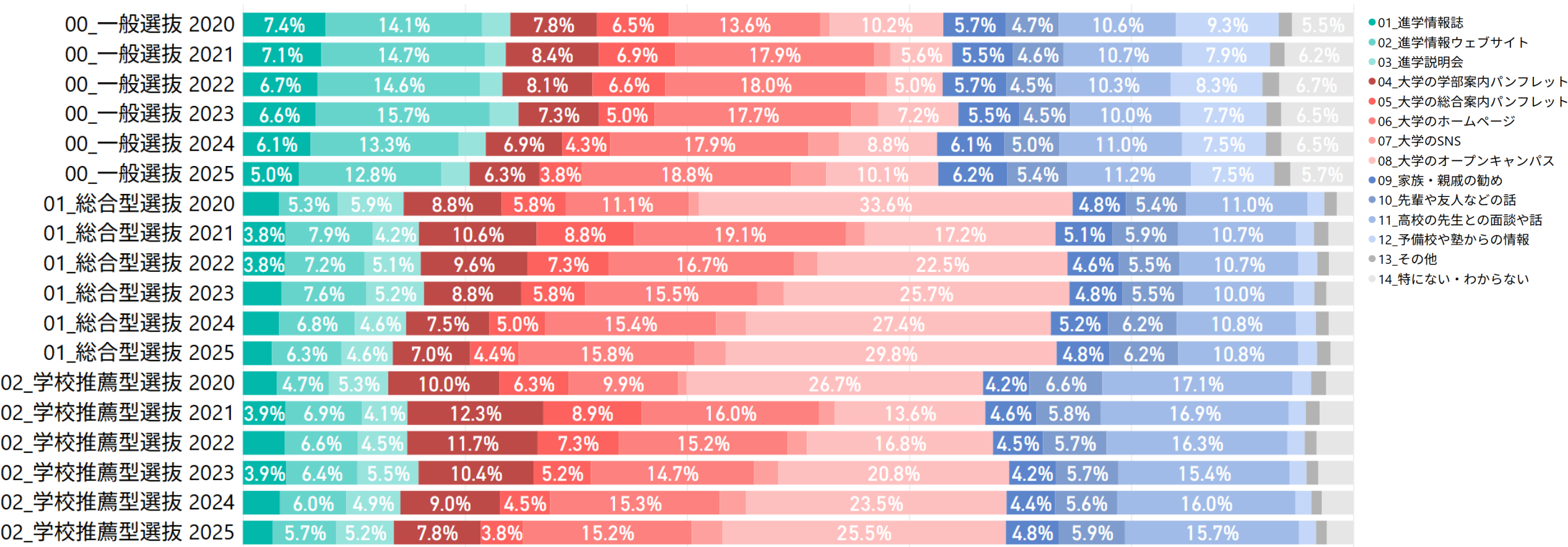
一般選抜では自習時間が増加し、年内入試では自習をしない層が拡大

一般選抜では2023年以降自習時間が増加し、2025年では「10時間以上」が全体の1/4を超えた
一方で総合型選抜と学校推薦型選抜では自習をしない層が拡大傾向で、総合型選抜では1時間未満が1/3強に



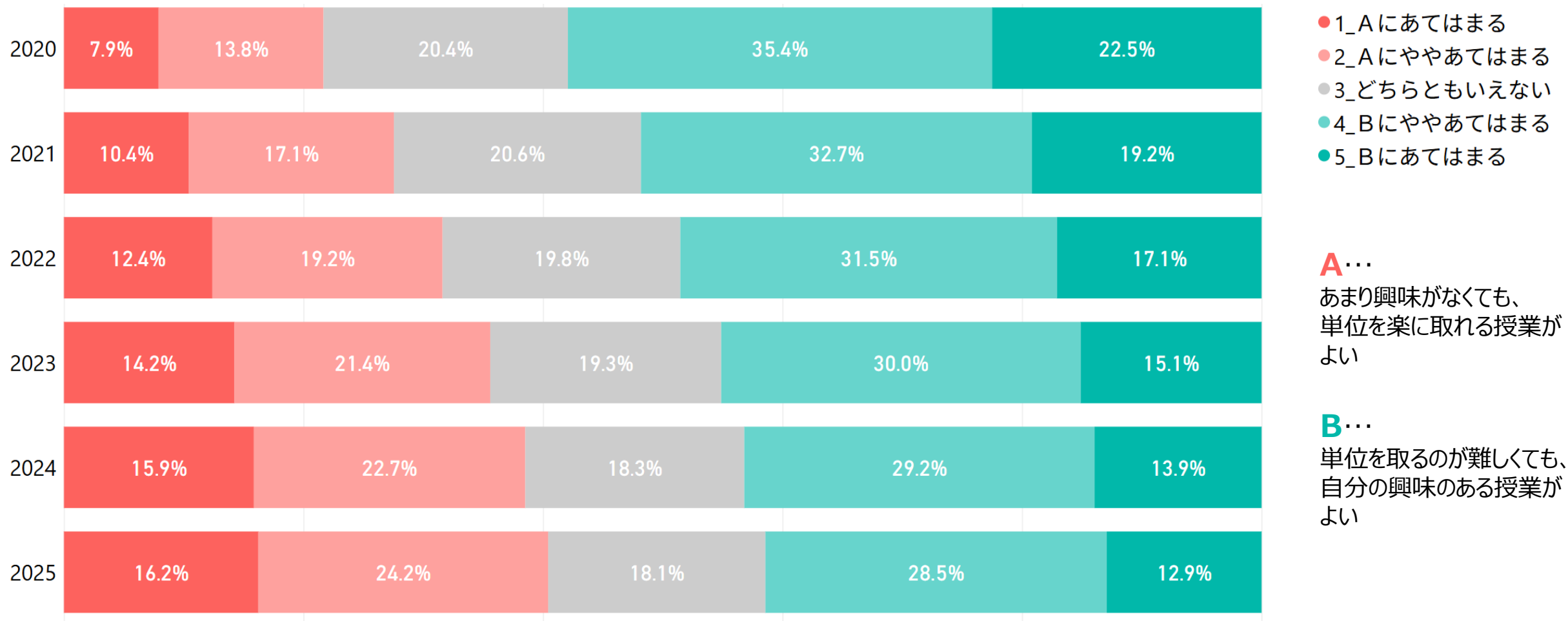
「オープンキャンパス」の選択率がもっとも高くなった

「オープンキャンパス」が2021年以降選択率が高まり、2025年度では2割弱と最多で、2020年よりも高くなった
一方で「進学情報ウェブサイト」やパンフレット類は、選択率が低下してきている



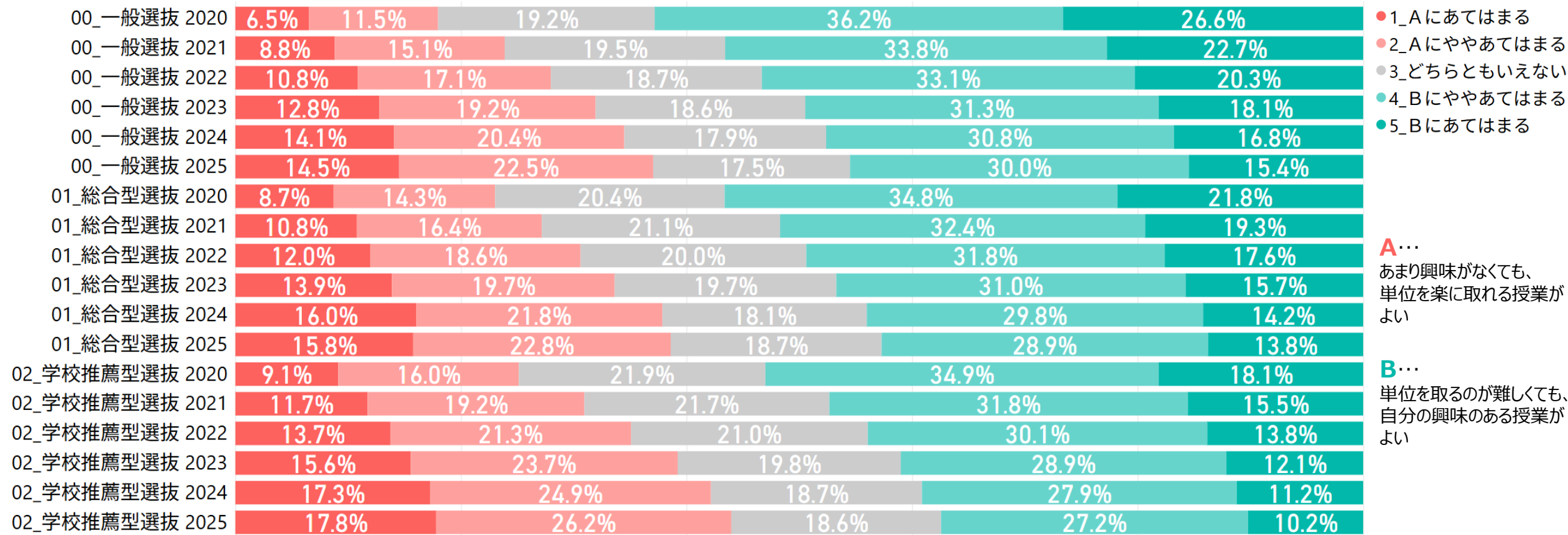
入試方式によって情報源にばらつき

一般選抜では「オープンキャンパス」の選択率は増加傾向ながら低く、最多は「大学のホームページ」であり、他の選択肢の選択率も高い
年内入試では「オープンキャンパス」が増加傾向かつ最多だが、学校推薦型では「高校の先生との面談や話」がその次に多い



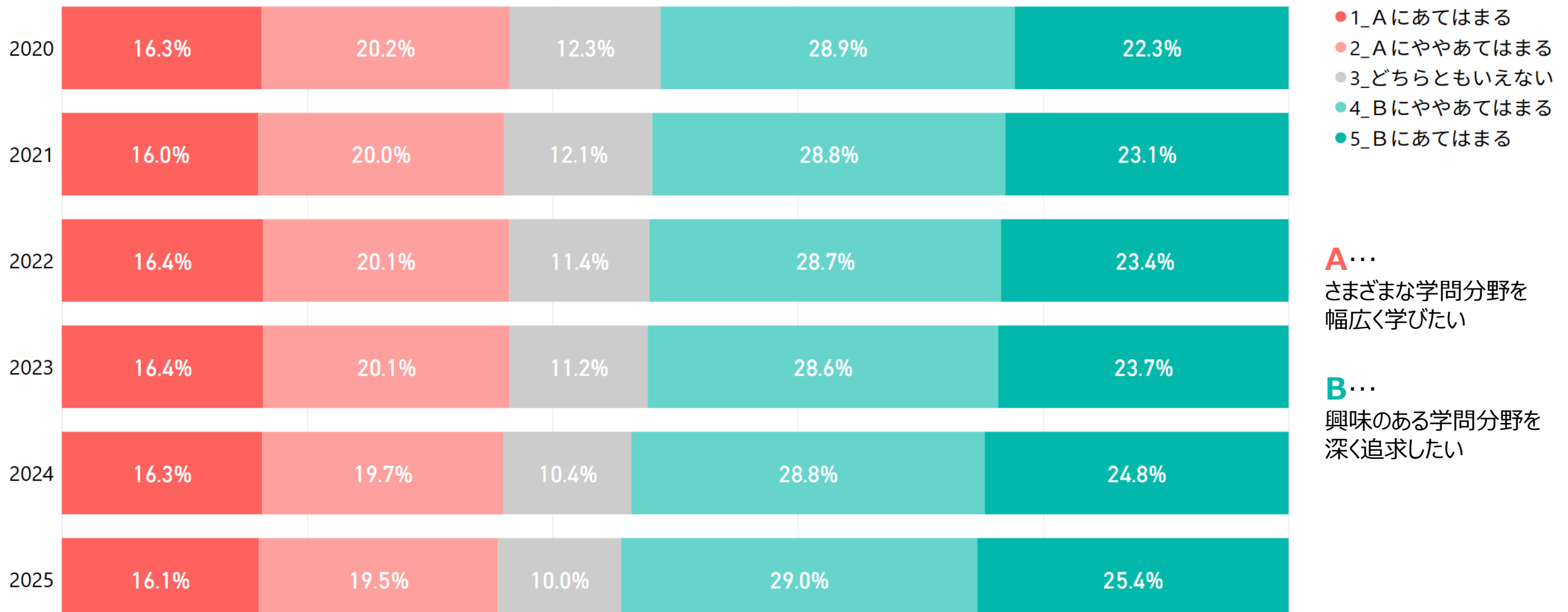
「楽単思考」の学生が4割を超える

「楽に単位が取れる授業がよい」に対して「あてはまる」+「ややあてはまる」と回答した学生の比率は増加傾向
2025年では4割を超え、「興味のある授業がよい」とほぼ同じ比率に



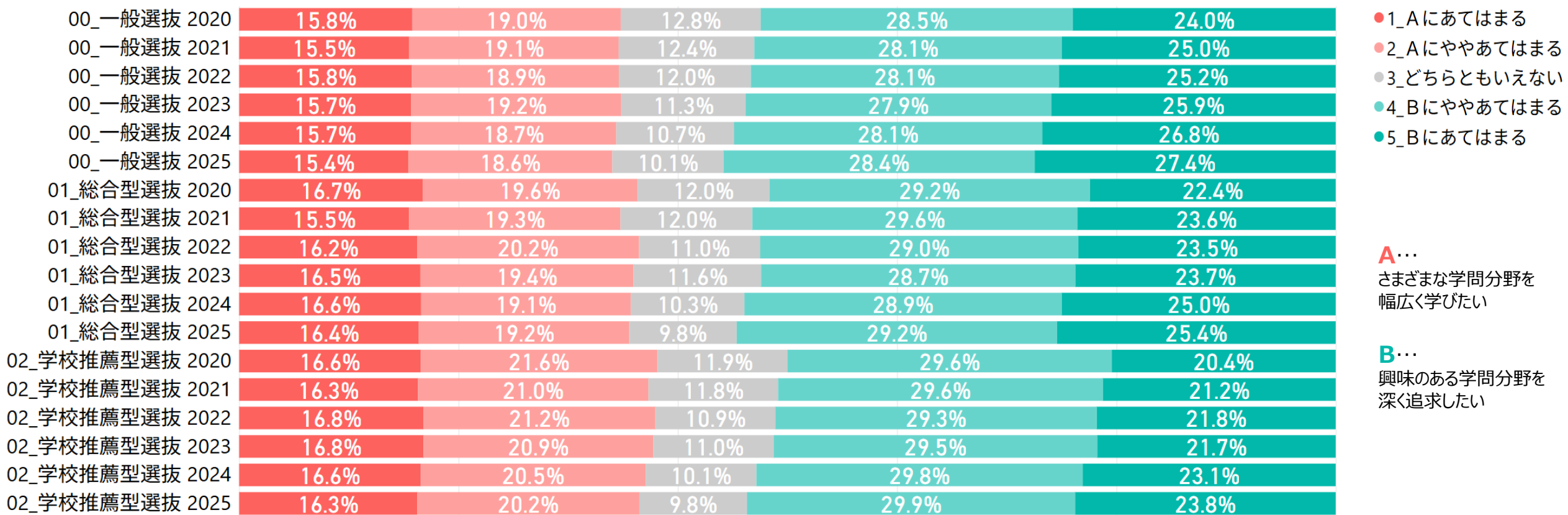
どの入試方式でも「楽単志向」が拡大

どの入試方式でも「単位を楽に取れる授業がよい」とする学生の比率が5年連続で増加
特に学校推薦型では4割強と、「興味のある授業がよい」を上回る選択率となっている



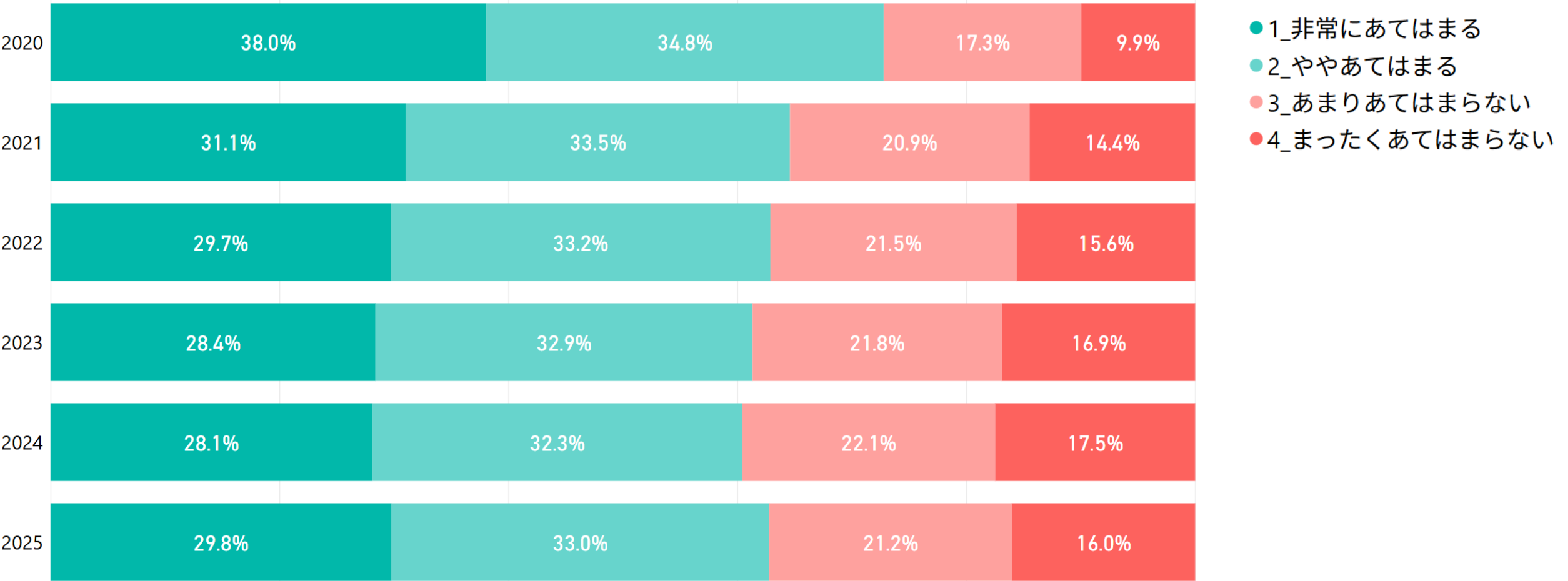
「深く追求したい」とする学生が増加傾向

「幅広く学びたい」を選択する（「あてはまる」+「ややあてはまる」）学生の比率は安定的であり、1/3以上の学生が選択
一方で「深く追求したい」とする学生は増加傾向で、2025年では「あてはまる」だけでも1/4を超えた



入試方式による差は見られない

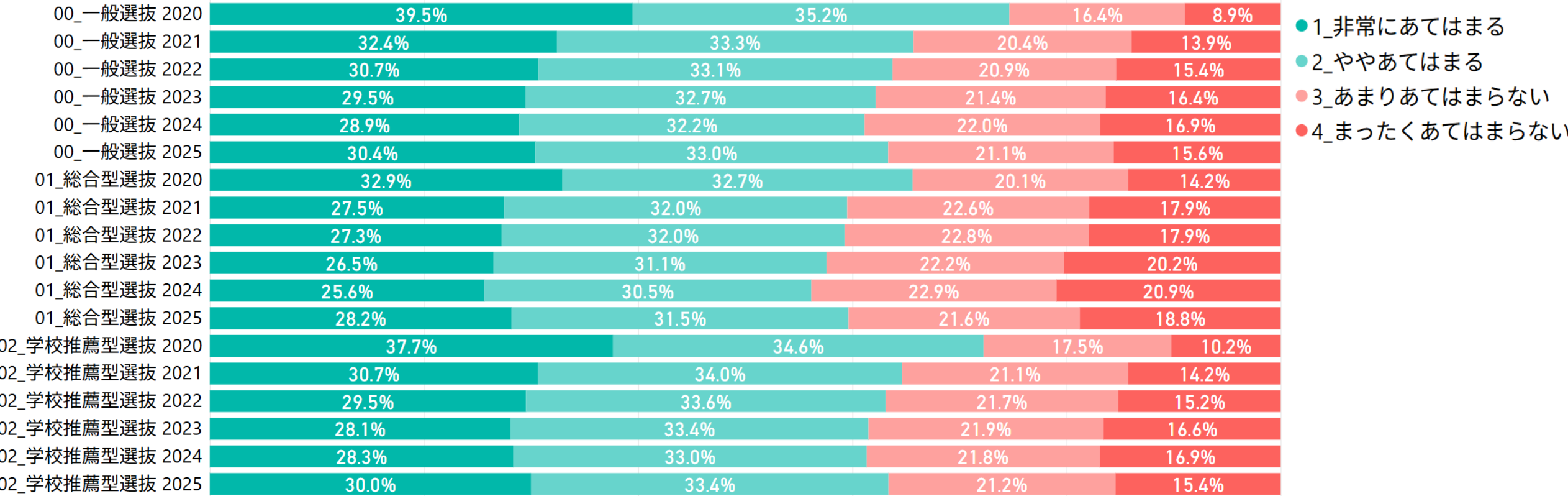
「幅広く学びたい」とする学生の比率はどの入試方式でも安定的に推移
「深く追求したい」を「あてはまる」と回答する学生もほぼ同比率で増加



友人関係の不安がやや増加

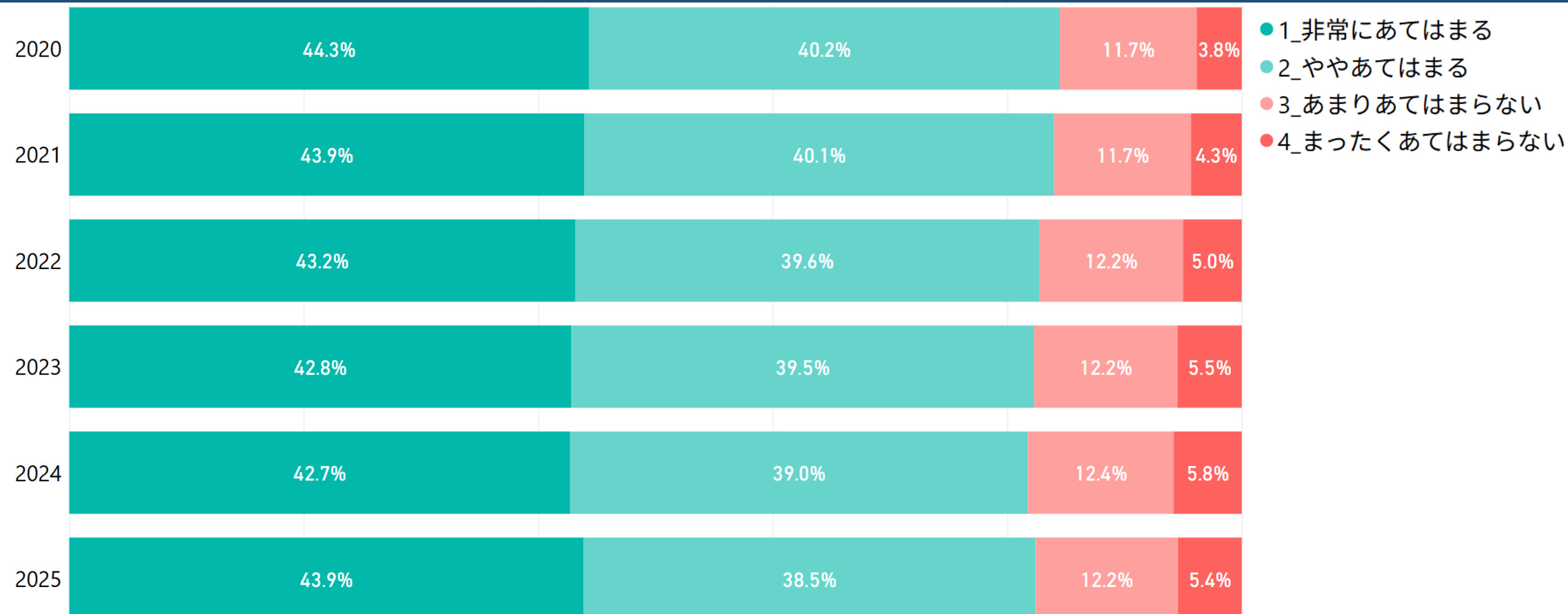
減少傾向が続いていた「友人ができるか不安がある」の肯定回答率（「非常にあてはまる」+「ややあてはまる」）が2025年にわずかながら増加に転じた
ただし、2020年の水準にまでは至っていない

学生生活への不安の変化① 「友人ができるか不安がある」(入試方式別)



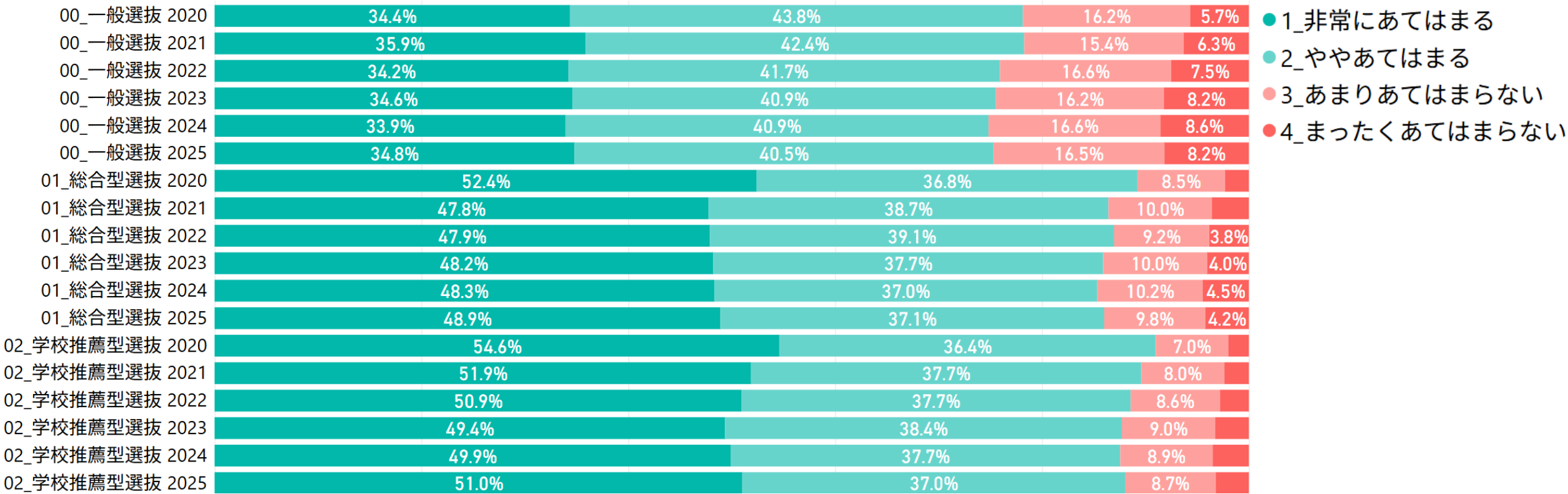
入試方式による差は、見られない

どの入試方式でも「友人ができるか不安がある」の肯定回答率（「非常にあてはまる」+「ややあてはまる」）が2025年に増加
否定回答率（「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」）は総合型選抜が他の方式よりもやや高い



授業への不安がやや増加

「授業についていけるか不安がある」に対して「非常にあてはまる」と回答した学生の比率が、2025年で増加に転じる
「ややあてはまる」まで加えると、授業に不安がある学生の比率は8割を超える



年内入試の学生の授業に対する不安が強い

どの入試方式でも2025年で「非常にあてはまる」が増加に転じる

ただし、一般選抜ではその比率が1/3程度であるのに対し、年内入試では5割前後となっている

■旧課程（大学2年生以上）

教科	科目	標準 単位数	必修 科目
国語	国語総合	4	○2単位まで選択可
	国語表現	3	
	現代文A	2	
	現代文B	4	
	古典A	2	
	古典B	4	
地理 歴史	世界史A	2	□○ ○
	世界史B	4	
	日本史A	2	
	日本史B	4	
	地理A	2	
	地理B	4	
公民	現代社会	2	「現代社会」又は 「倫理」「政治・経済」
	倫理	2	
	政治・経済	2	
数学	数学Ⅰ	3	○2単位まで選択可
	数学Ⅱ	4	
	数学Ⅲ	5	
	数学A	2	
	数学B	2	
	数学活用	2	
理科	科学と人間生活	2	□「科学と人間生活」を含む2科目又は基礎を付した科目を3科目
	物理基礎	2	
	物理	4	
	化学基礎	2	
	化学	4	
	生物基礎	2	
	生物	4	
	地学基礎	2	
	地学	4	
外国語	コミュニケーション英語基礎	2	○2単位まで選択可
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	
	コミュニケーション英語Ⅱ	4	
	コミュニケーション英語Ⅲ	4	
	英語表現Ⅰ	2	
	英語表現Ⅱ	4	
	英語会話	2	
情報	社会と情報	2	□○
	情報の科学	2	
総合的な学習の時間		3～6	○2単位まで選択可



■新課程（大学1年生）

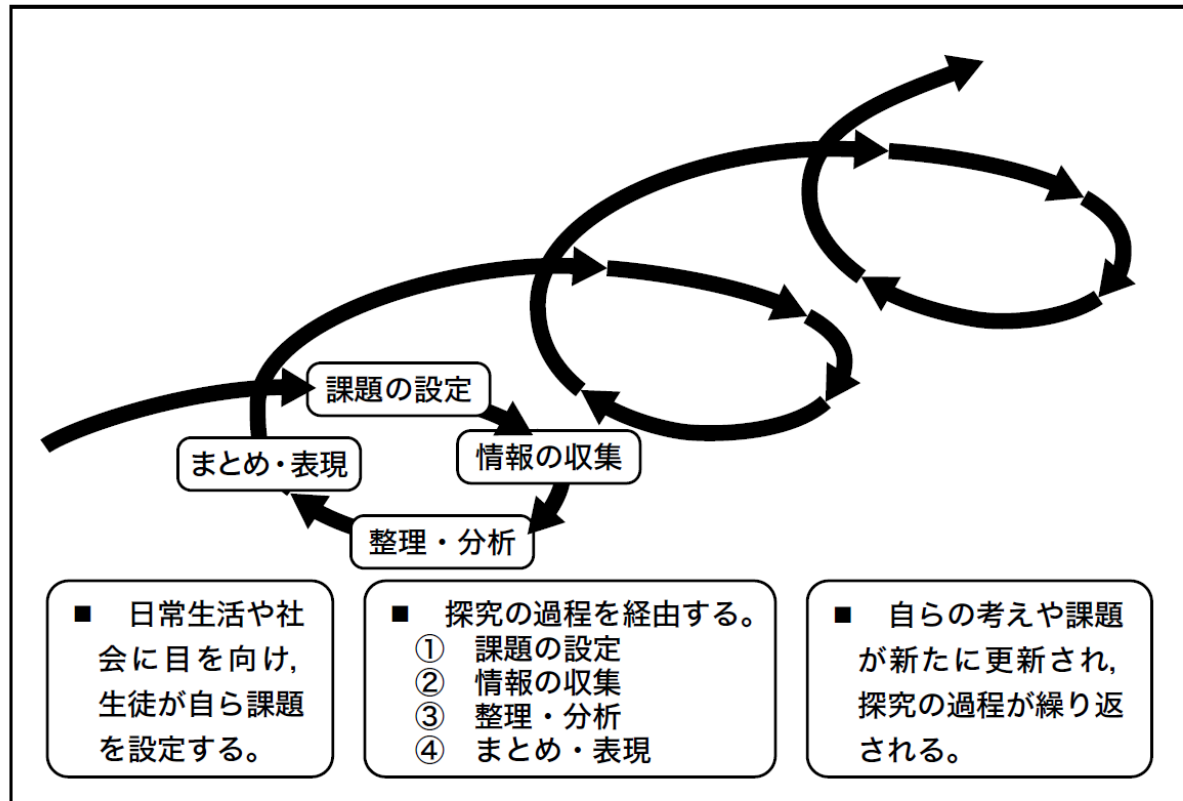
教科	科目	標準 単位数	必修 科目
国語	現代の国語	2	○
	言語文化	2	
	論理国語	4	
	文学国語	4	
	国語表現	4	
	古典探究	4	
地理 歴史	地理総合	2	○
	地理探究	3	
	歴史総合	2	
	歴史探究	3	
	日本史探究	3	
	世界史探究	3	
公民	公共	2	○
	倫理	2	
	政治・経済	2	
数学	数学Ⅰ	3	○2単位まで選択可
	数学Ⅱ	4	
	数学Ⅲ	3	
	数学A	2	
	数学B	2	
	数学C	2	
理科	科学と人間生活	2	□「科学と人間生活」を含む2科目又は基礎を付した科目を3科目
	物理基礎	2	
	物理	4	
	化学基礎	2	
	化学	4	
	生物基礎	2	
	生物	4	
	地学基礎	2	
	地学	4	
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	○2単位まで選択可
	英語コミュニケーションⅡ	4	
	英語コミュニケーションⅢ	4	
	論理・表現Ⅰ	2	
	論理・表現Ⅱ	2	
	論理・表現Ⅲ	2	
情報	情報Ⅰ	2	○
	情報Ⅱ	2	
理数	理数探究基礎	1	
	理数探究	2～5	
総合的な探究の時間		3～6	○2単位まで選択可

変化のポイント

- ①文系科目の再編
 - ・「現代の国語」「言語文化」
 - ・「地理総合」（49年ぶりに必修科目）
 - ・「歴史総合」（世界史と日本史の近現代史の融合科目）
 - ・「公共」（旧課程の「現代社会」の後継科目という位置づけ）
 - ・「論理・表現Ⅰ」 など
- ②「数学C」の新設
- ③共通必修科目として「情報Ⅰ」の新設
- ④「理数探究」「総合的な探究の時間」の新設

* 文部科学省「高等学校学習指導要領」より作成

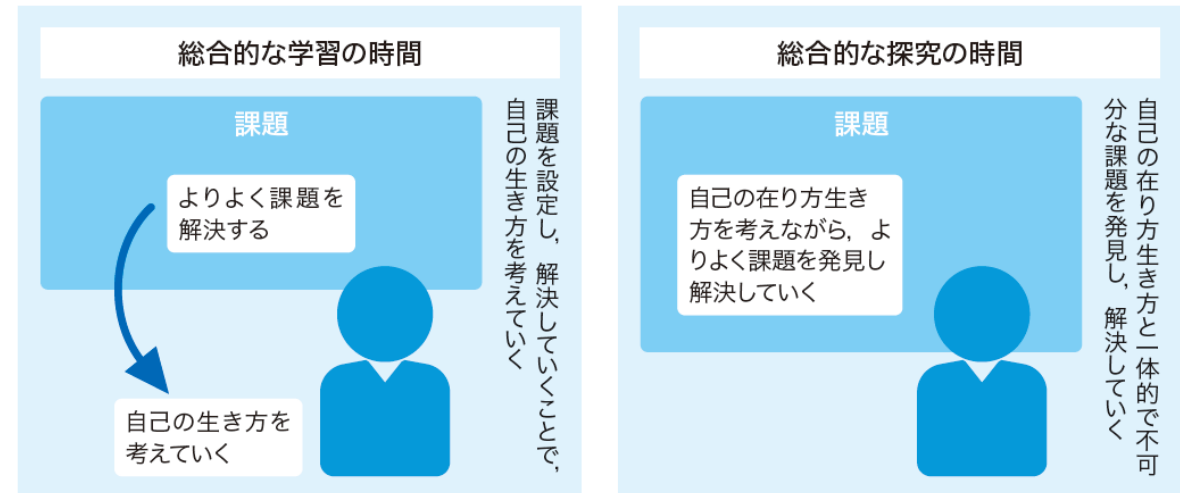
探究における生徒の学習の姿



第1 目標

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

(2) 課題の設定において、生徒が自分で課題を発見する過程を重視する

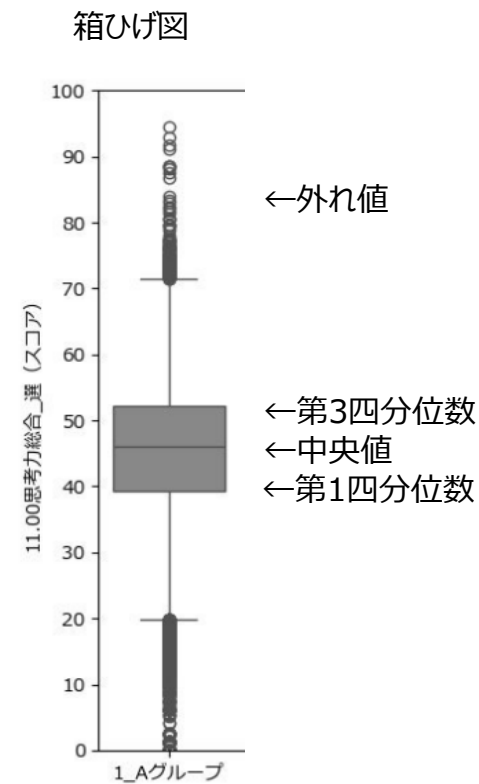
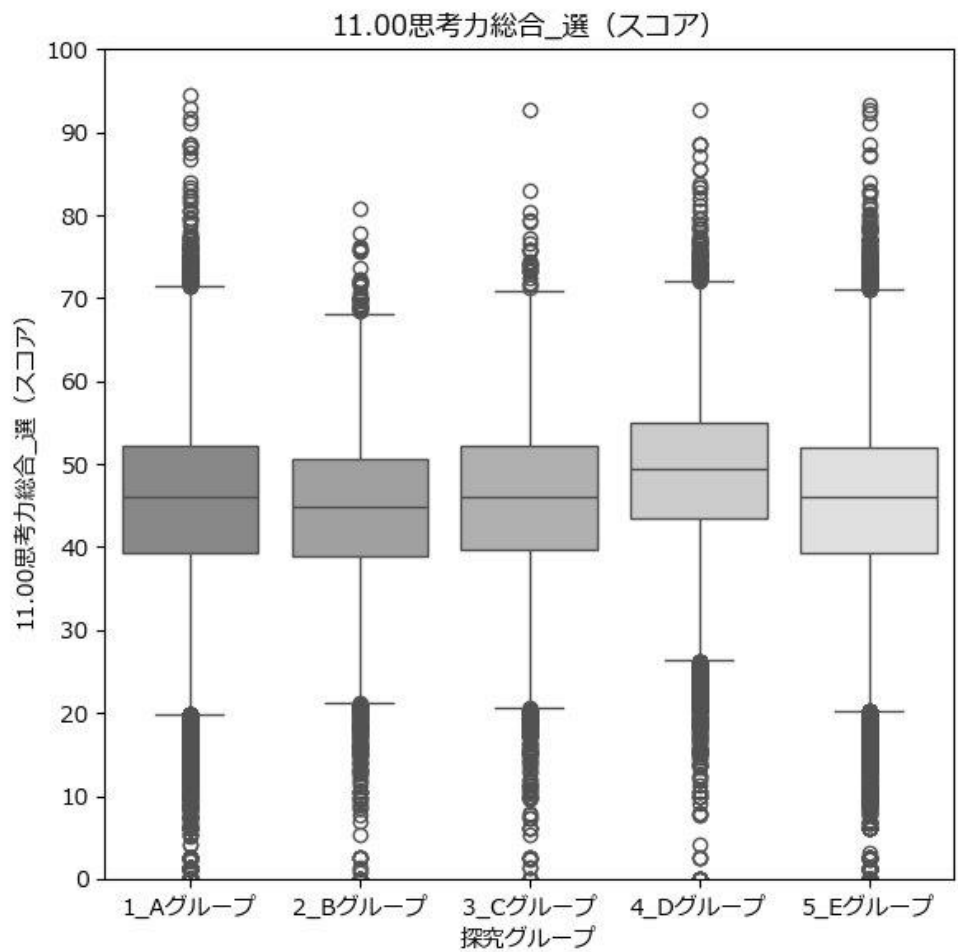


* 左図・右上図：文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30 年告示）解説 総合的な探究の時間編」（2019年3月28日）

* 右下図：文部科学省「今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開 高等学校編」（2023年3月）

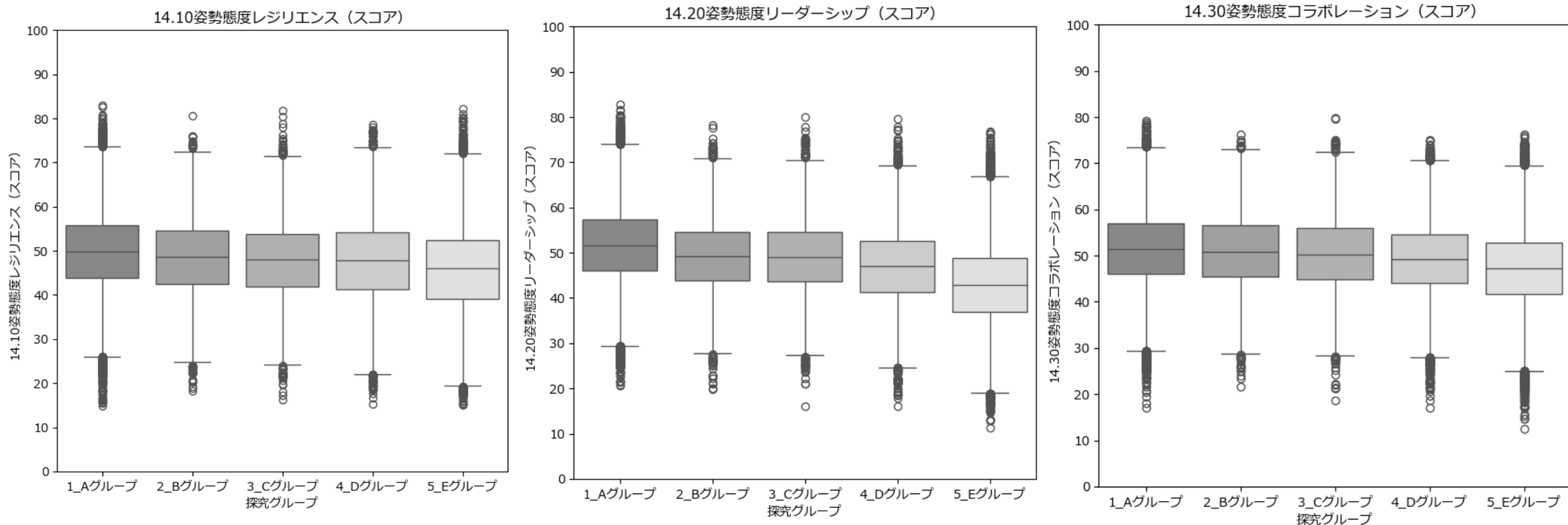
★検証したいこと：高校時代に「探究」などを通じてどのような経験をしたかによって、
学生の思考力や姿勢・態度などに違いが出るのではないか

	GPS-Academicの「経験」（段階値）			人数	説明
	課題を設定する	解決策を立案する	実行・検証する		
Aグループ	SA	SA	SA	35,376	課題設定、解決策立案、実行検証のすべてをよくやっていた学生群
Bグループ	BCD	SA	SA	6,074	課題設定は平均的またはそれ以下だが、 解決策立案と実行検証 はよくやっていた学生群
Cグループ	SA	BCD	SA	6,318	課題設定と実行検証 はよくやっていたが、解決策立案は平均的またはそれ以下だった学生群
Dグループ	SA	SA	BCD	13,709	課題設定と解決策立案 はよくやっていたが、実行検証が平均的またはそれ以下だった学生群
Eグループ	BCD	BCD	BCD	39,385	課題設定、解決策立案、実行検証のすべてが平均的またはそれ以下だった学生群



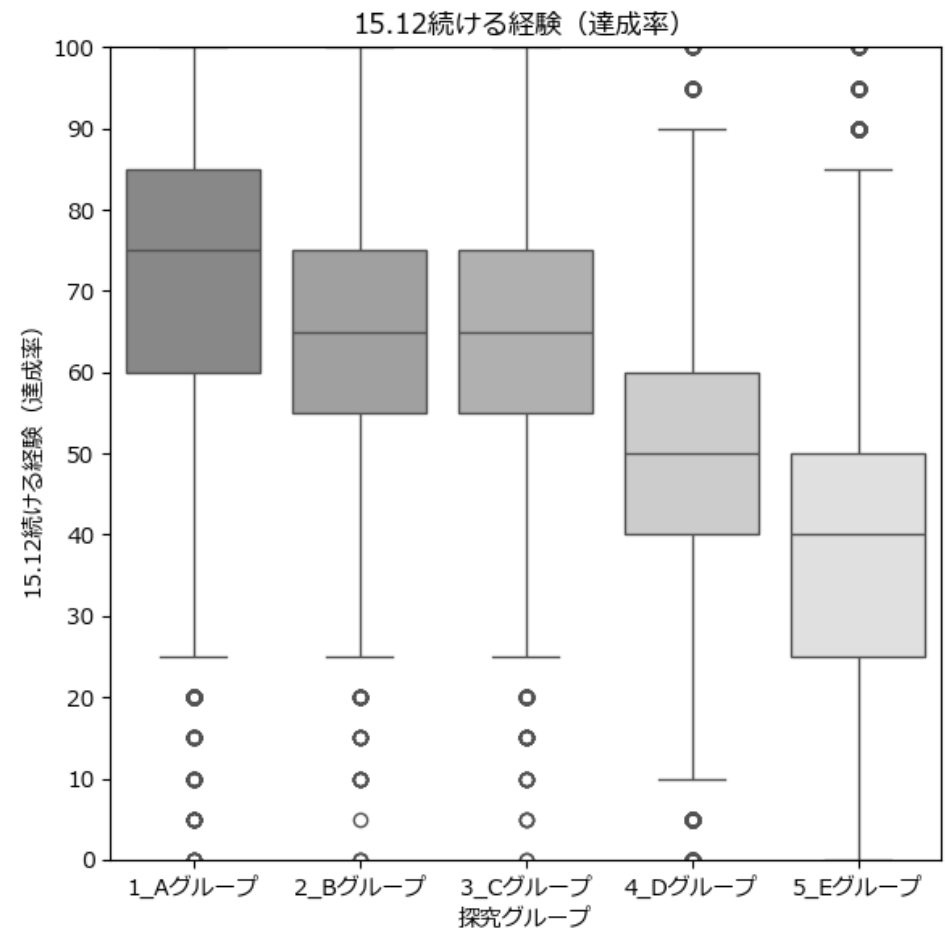
思考力には大きな差は見られない

思考力総合では、グループ間での大きな差は見られない
Dグループの平均スコアがやや高い



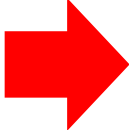
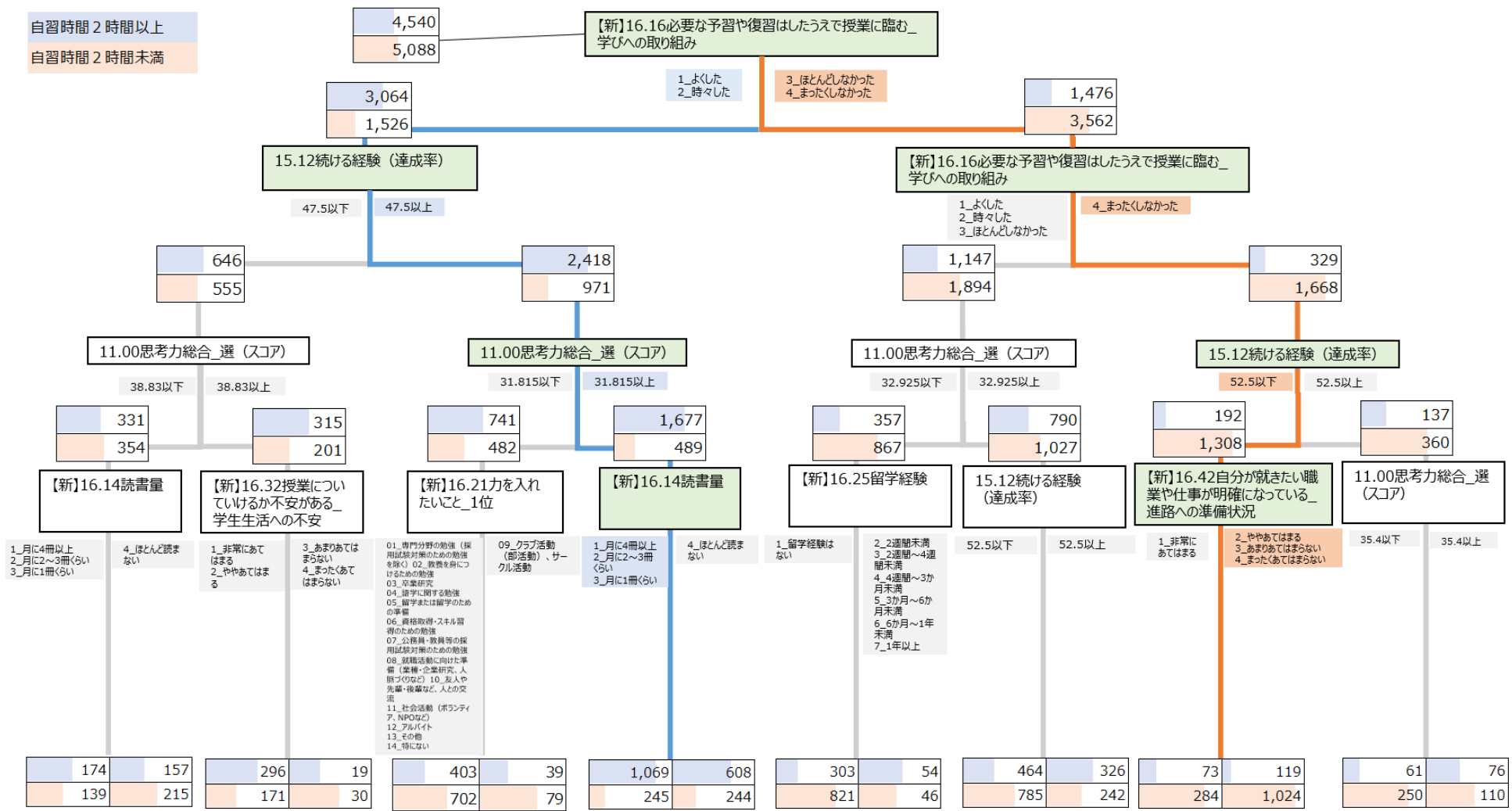
Aグループの姿勢・態度スコアが高い

レジリエンス、リーダーシップ、コラボレーションのいずれでもAグループのスコアは高く、特にリーダーシップで他のグループよりも高くなっている一方で、Eグループはどの姿勢・態度も他のグループと比較して低い



「続ける経験」がAグループが高く、D・Eグループが低い

「続ける経験」は、Aグループがもっとも高いスコアとなった
D・Eグループが低く、Eグループがもっとも低い

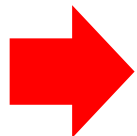


授業の予復習に加えて、「続ける経験」をしていることが重要

- 思考力が高いこと、読書量を確保していること、就きたい職業が非常に明確になっていること等も影響

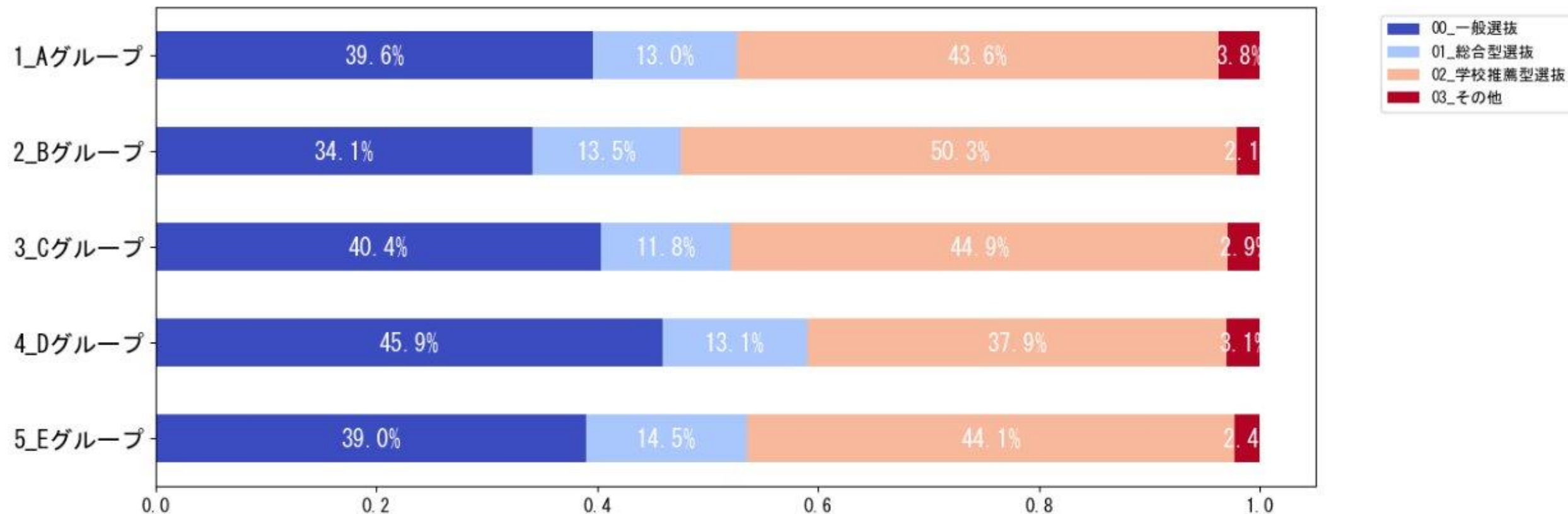
GPS-Academicで「続ける経験」を問う質問

- 勉強や進路などの目標は忘れずに意識した
- 勉強の習慣をつける工夫をした
- 苦手なことでも続けられるように工夫した
- 勉強がうまくいかなかったときは、いろいろなやり方を試した
- 自分の目標は達成するまであきらめずやり遂げた



目標達成に向けて、工夫をしながら継続的に勉強できる、「自己管理能力」を養う経験

- 高校の新課程で重視される「**自己調整学習**」によって、さらに涵養される可能性

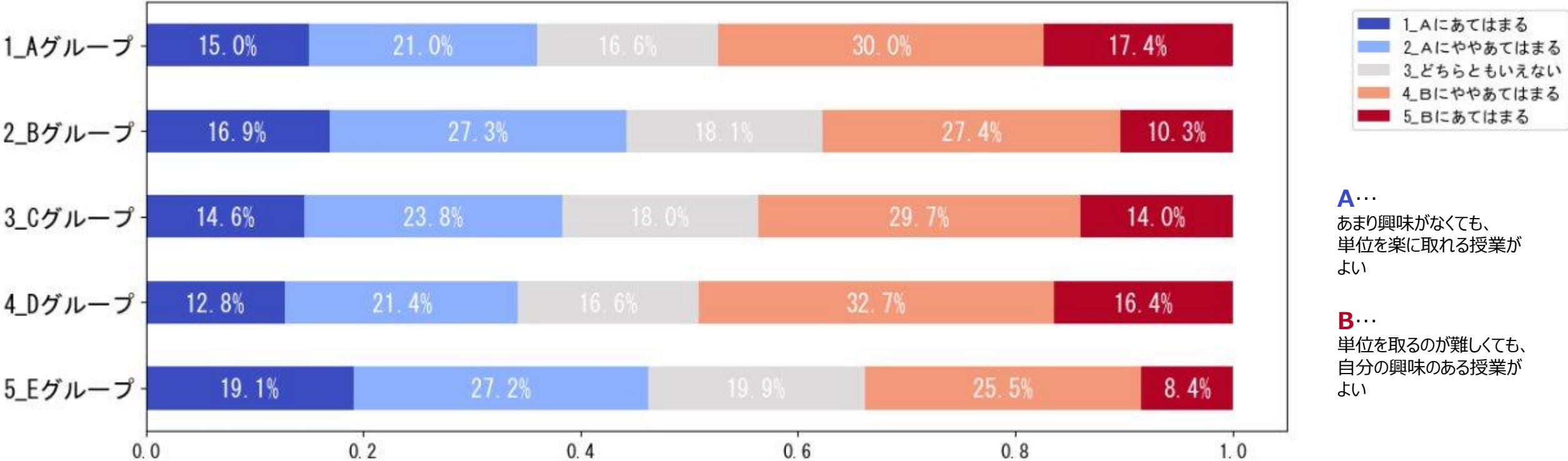


Dグループには一般選抜が多く、Bグループでは学校推薦型が多い

Dグループは一般選抜の学生の比率が高く、Bグループは学校推薦型の学生の比率が高い

総合型選抜の学生はどのグループでもほぼ同比率で存在

【新】16.10あまり興味がなくても、単位を楽に取れる授業がよい⇔B単位を取るのが難しくても、自分の興味のある授業がよい_履修選択の考え方



A...
あまり興味がなくても、
単位を楽に取れる授業が
よい

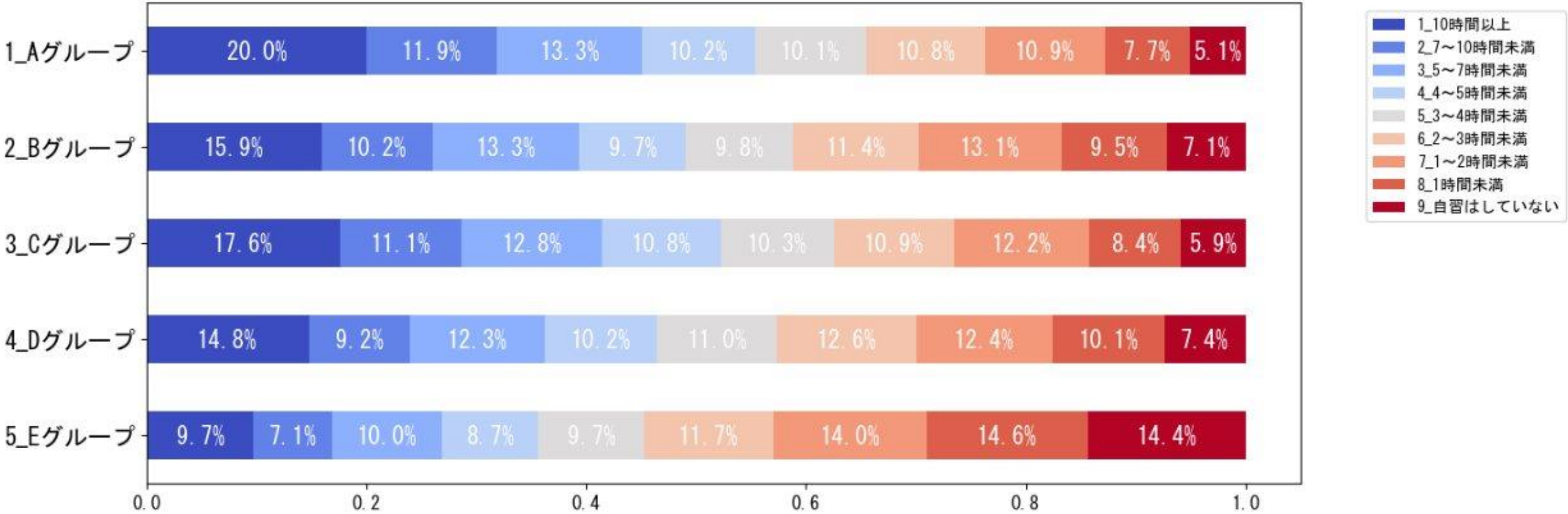
B...
単位を取るのが難しくても、
自分の興味のある授業が
よい

「楽単志向」が強いのはEグループ

「単位を楽に取れる授業がよい」と考える学生がもっとも多いのはEグループ

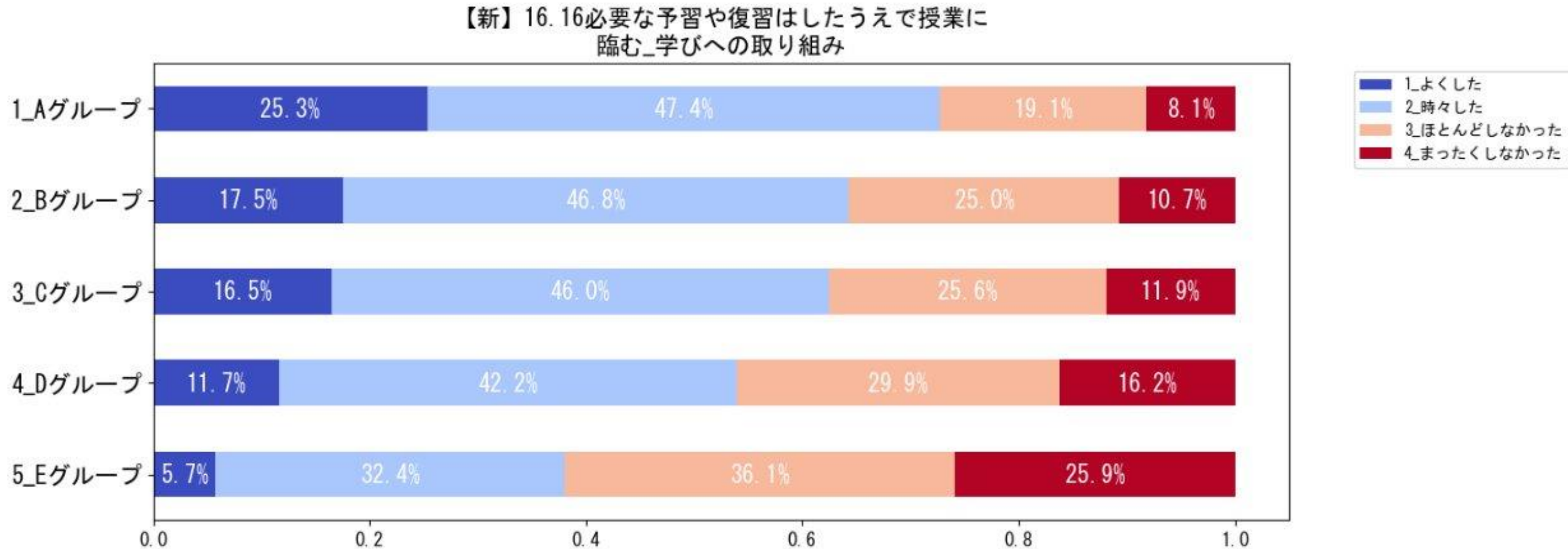
「興味のある授業がよい」と考える学生がもっとも多いのはDグループだが、「あてはまる」がもっとも高いのはAグループ

【新】 16. 15自習時間（週あたり）



3時間以上の自習時間を確保できているのはAグループ

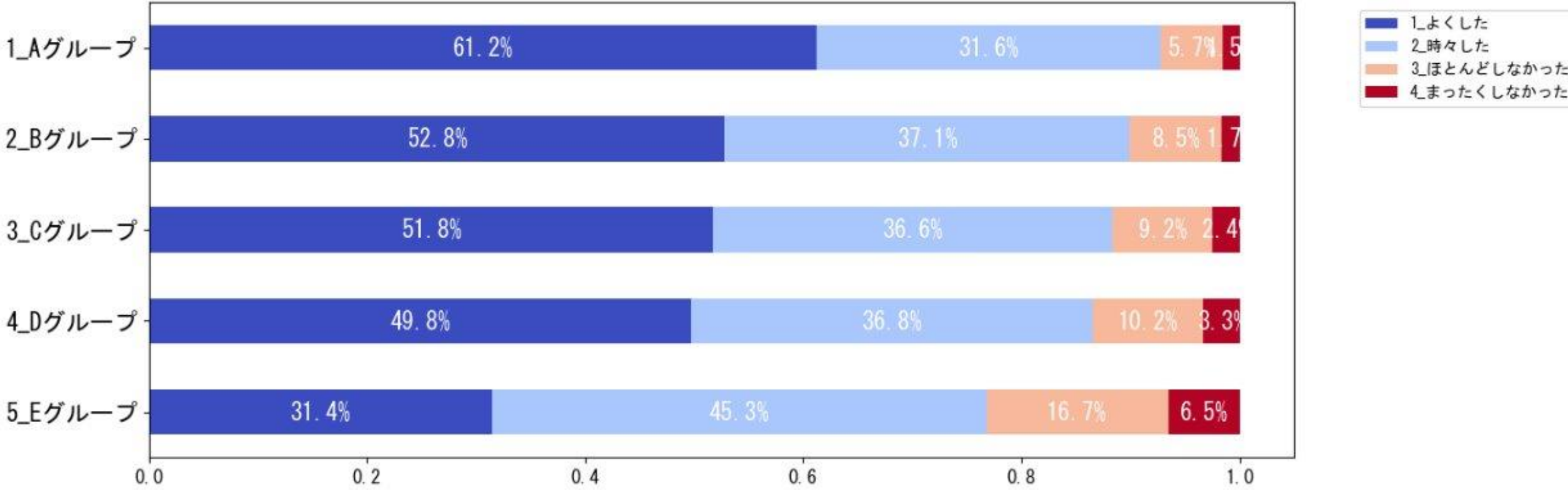
Aグループでは自習時間として3時間以上確保できていた学生が多い
一方でEグループの自習時間は短く、1時間未満だった学生が3割弱となっている



予復習の習慣はグループ間で差が見られる

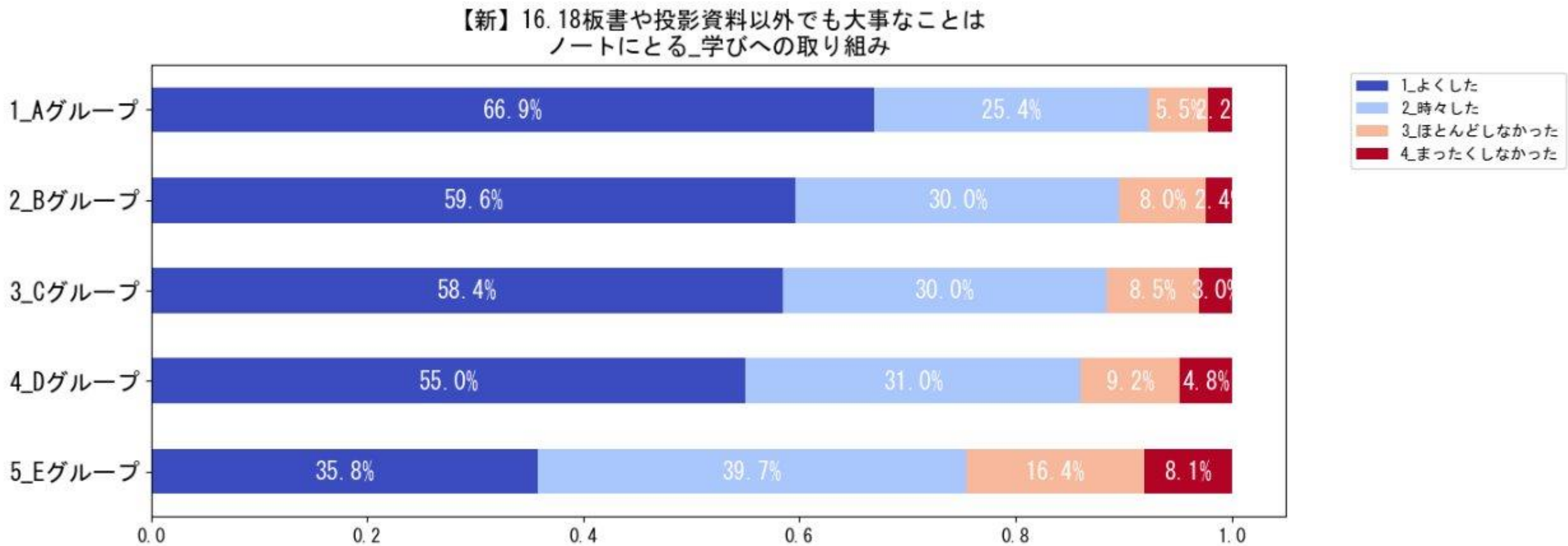
予復習を「よくした」+「時々した」と回答した比率がもっとも高いのはAグループで、7割を超える
以下、B>C>D>Eの順となり、Eグループでは「まったくしなかった」が1/4を超える

【新】16.17授業中、グループワークやディスカッションに積極的に参加する_学びへの取り組み



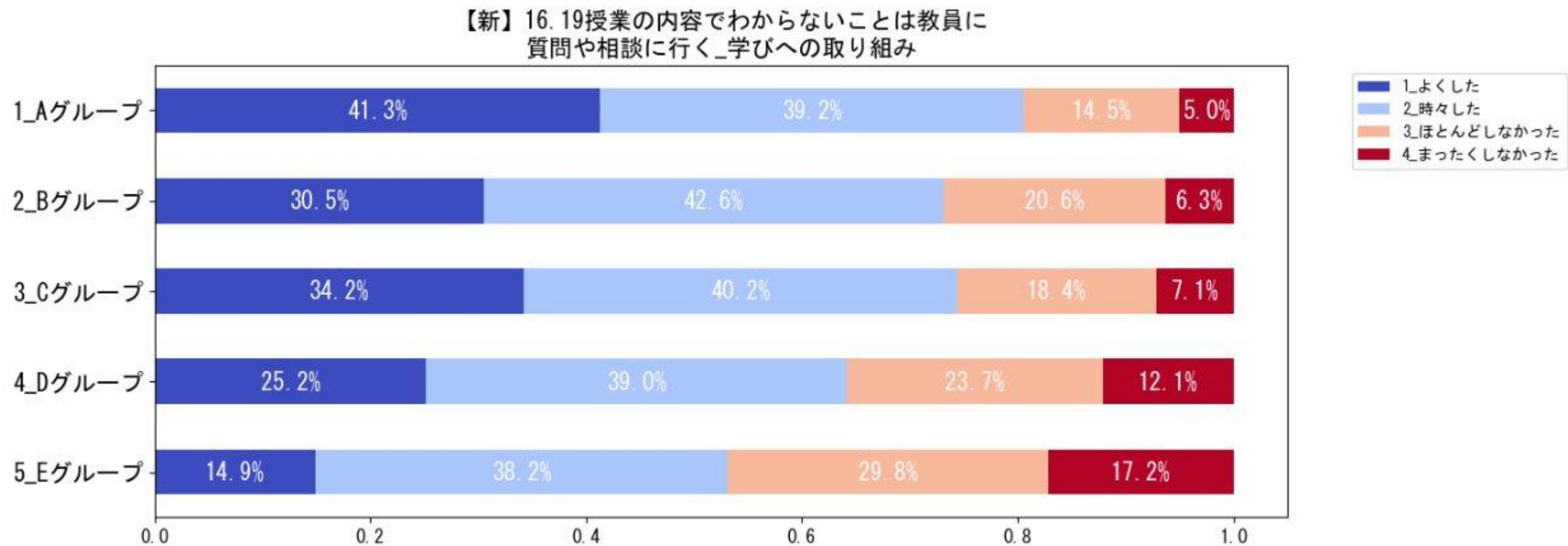
グループワーク等の参加には、グループ間の差が見られる

Aグループの学生の6割以上は、グループワーク等への積極的な参加を「よくした」と回答し、グループ間でもっとも高い
以下、B>C>D>Eの順となり、Eグループでは3割程度にとどまる



「大事なことをノートにとる」では、グループ間の差が見られる

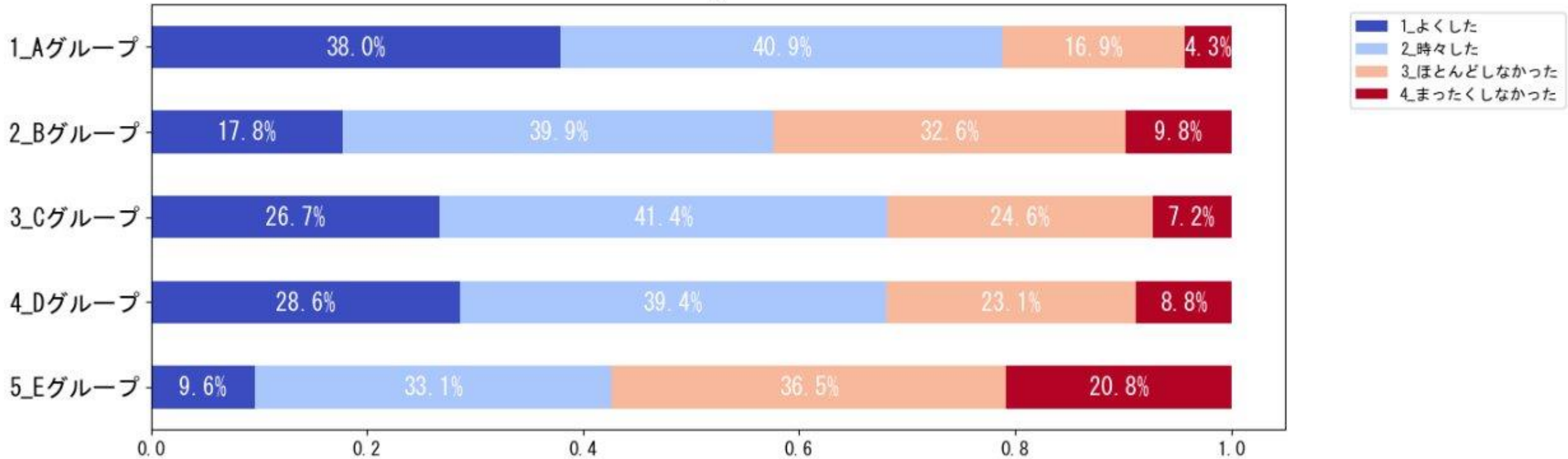
「大事なことをノートにとる」ことを「よくした」学生の比率がもっとも高いのはAグループで、7割弱
以下、B＞C＞D＞Eの順で、Eグループでは1/3程度にとどまる



「教員への質問」をよくしたのはAグループとCグループ

「教員への質問」を「よくした」比率がもっとも高いのは、約4割のAグループ
その次に高いのはCグループで、1/3以上の学生が「よくした」と回答

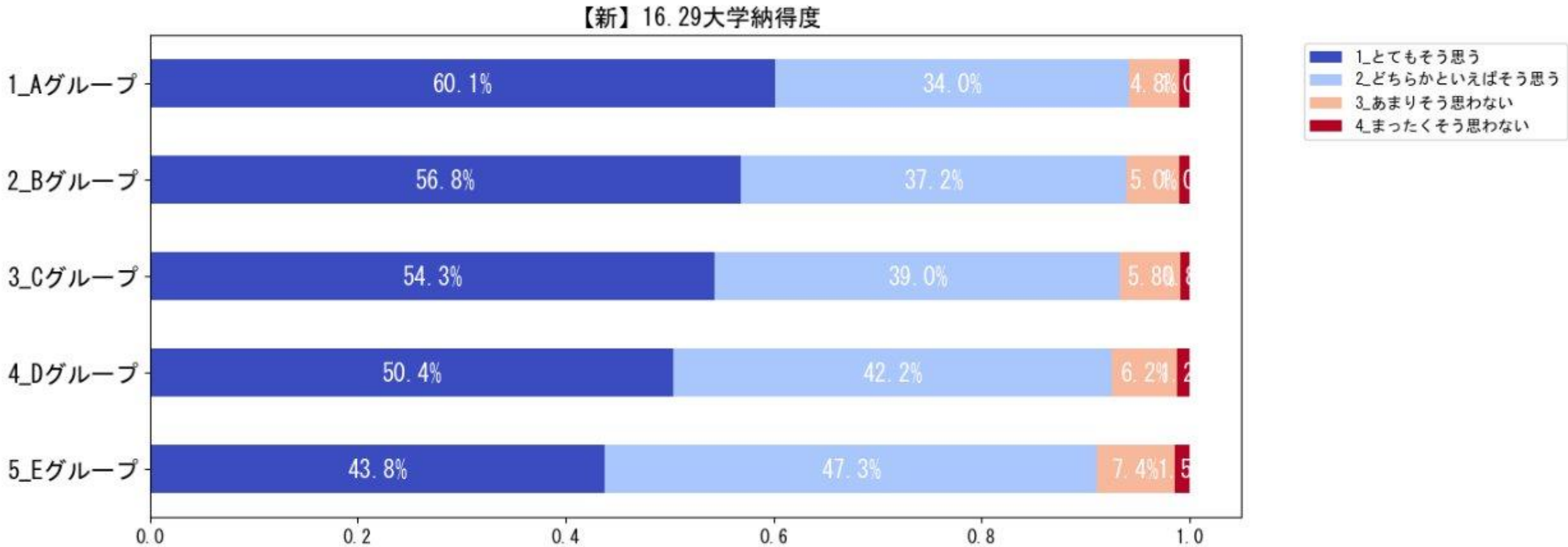
【新】 16. 20授業と関わりのないことでも、興味を持ったことについて自主的に学習する_学びへの取り組み



「自主的な学習」をもっともよくしたのはAグループ°

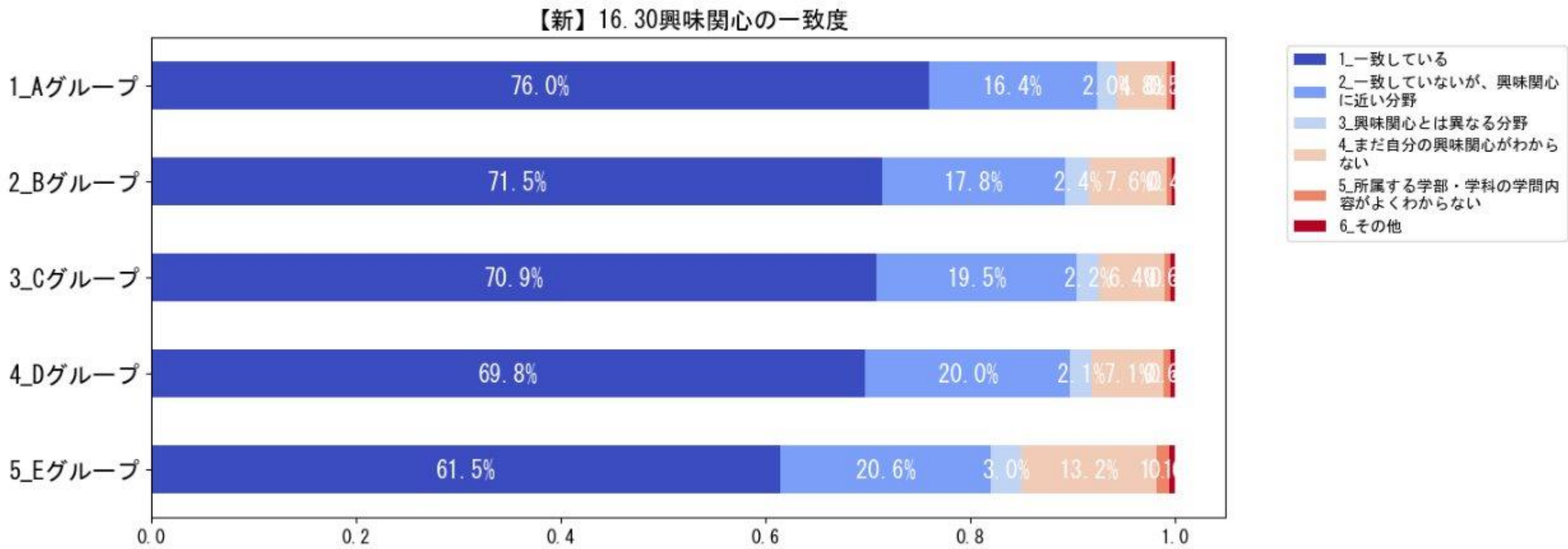
Aグループの学生は「自主的な学習」を「よくした」と4割弱の学生が回答

次いで、C・Dグループがほぼ同比率で並ぶが、Bグループでは2割以下、Eグループでは1割以下となる



「大学納得度」では、「とても思う」かにグループ間で差が見られる

「あなたが通う大学に入学して良かったと思うか」に対する肯定回答率（「とても思う」+「どちらかといえば思う」）は、どのグループでも9割を超える
ただし、「とても思う」では違いがあり、6割を超えるAグループから順に、B>C>D>Eとなっている



「興味関心の一致度」は、3つに分かれた

「通学する学部・学科の学問内容と、自分の興味関心」が「一致している」と回答した学生の比率がもっとも高かったのは、8割弱のAグループ
B・C・Dグループがそれぞれ7割前後で並び、Eグループは約6割にとどまった



二極化・多様化

- 思考力
- 大学選択の情報源

全面的な変化

- 「楽単志向」の拡大
- グループワークやディスカッションへの積極性向上
- 授業の予復習実施率の低下
- 自習時間の減少
★特に年内入試



- ✓ **学習習慣の再確立と「自己調整学習」の促進**
 - 高校での「新課程」や「一人1台端末」の影響への注目と、高大連携の強化
- ✓ **学生の特徴に応じた対応の強化**
 - 入試区分等のフラグに存在した「ステレオタイプ的な学生像」の見直し



「学内データ」「客観データ」「主観データ」で学生を多面的に可視化・把握し
面談等で「個」に応じた対応・指導を行うことの重要性 = 「**学修者本位の教育**」の実践

長期トレンドとしての変化

+

- ・ グループワークへの積極的な参加
- ・ 議論の目的を明確にする経験の増加

+/-

- ・ 自習時間は一般入試で増加／年内入試で減少
- ・ 「深く追求したい」学生の増加

-

- ・ 多様な人との交流意欲の減少
- ・ 予復習の習慣の減少
- ・ 「楽単志向」の拡大

2025年度固有の変化

+

- ・ **【探究をしっかりできていた学生群】**
 - ✓ 高いリーダーシップ
 - ✓ 「続ける経験」が豊富
 - ✓ 習慣的な予復習
 - ✓ グループワークへの積極的な参加
 - ✓ 自主的な学習
 - ✓ 高い大学納得度
 - ✓ 高い興味関心の一致度

-

- ・ 友人関係の不安の拡大
- ・ 授業に対する不安の拡大



「効率的な学び」への志向性が高まる中で、「高校での学び」が大学での学びに与える影響が拡大する可能性
⇒ 多様化する高校での学びを把握し、個別化する学生の「学修姿勢や意欲」に対応する重要性